# 箱 崎 33

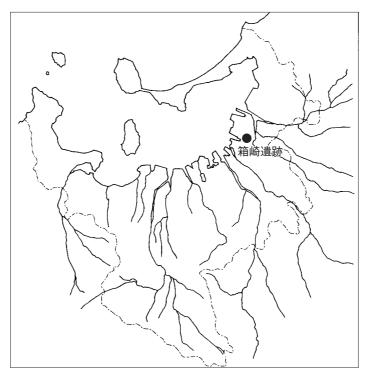
一箱崎遺跡第52次調査の報告ー 福岡市埋蔵文化財調査報告書第997集



2008 福岡市教育委員会

# 箱 埼 33

一箱崎遺跡第52次調査の報告ー 福岡市埋蔵文化財調査報告書第997集



遺跡略号 HKZ-52 調査番号 0626

2008 福岡市教育委員会

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として、また対外交易と外交の窓口と発展してきました。 このような歴史的環境のもとに市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましてはこの保護と活用に努めているところです。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によりやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を実施し、記録保存を行っています。

本書は、東区箱崎一丁目地内における共同住宅建設に先立って行われた箱崎遺跡第52次調査の成果の報告書です。

本調査では、主に平安時代から室町時代に至る集落跡や、輸入陶磁器などの多種多様な遺物を発見しました。調査地点は筥崎宮の南に近接する場所にあたりますが、本調査における中世の区画溝は、筥崎宮を中心に営まれた中世都市としての箱崎の街割の一部を示すと考えられ、これらの調査成果は箱崎地区の歴史を解明する重要な資料となりました。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用して頂れば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施についてご理解をいただき、調査費用の負担をはじめとする多大なご協力を賜った中原俊治氏をはじめとする関係各位の方々に対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会 教育長 山 田 裕 嗣

# 例 言

- 1. 本書は、福岡市教育委員会が平成18 (2006) 年 6 月15日から同年 8 月28日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設に伴う箱崎遺跡第52次調査の報告書である。なお発掘調査費用の一部は国庫補助金を適用している。
- 2. 遺構の呼称は記号化し、溝状遺構をSD、土坑をSK、井戸をSE、性格不明遺構をSX、柱穴をSPとしている。また遺構番号は、調査時における番号をもとに一部整理修正して報告している。
- 3. 本書の遺構図に用いる方位北は磁北である。調査区の座標は任意のものである。ただし、調査地 近隣で行われている筥崎土地区画整理事業地内に設置された測量基準杭より国土座標を移動して調 査区の国土座標上の位置を求めている(Fig. 2,3)。座標系は日本測地系による(ただし巻末抄録 は世界測地系とした)。またレベルは、上記の測量基準杭の標高から移動して用いている。
- 4. 本書に用いる遺構図は、久住猛雄、坂口剛毅、藤野雅基、小松寛子が実測し作成した。遺物の実測は、池崎譲二(埋蔵文化財第1課)、西堂将夫、平ノ内武史、久住猛雄が行った。拓本の採取は坂井かおり、宇野美嘉、宗近健太郎が行った。製図は坂井、平ノ内、成清直子、久住が行った。遺構写真および遺物写真は久住が撮影した。また本書の編集と執筆は久住が行った。
- 5. 本調査に関わる出土遺物と記録類(図面・写真)は、全て福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。
- 6. 表表紙写真は調査区の全景(北東から)である。

# 目 次

| I. 13   | はじめに   | • | 1  |
|---------|--|---|--|
| 1.      | 調査に至る経緯と調査の経過                                      | • | 1  |
| 2.      | 調査の組織  |   | 2  |
|         | 遺跡の立地と歴史的環境  | •••••                                   | 2  |
| Ⅱ. 誤    | 『査の記録  | • | 9  |
| -       | 調査地点の位置と基本層序                                       | • | 9  |
|         |  | • • • • • • • • • • • •                 | 12   |
| 3.      |  |   | 14   |
|         | ) 溝状遺構   |   |  |
| 2       | 2) 土坑・井戸   | • • • • • • • • • • •                   | 18   |
|         |  |   | 34   |
| 4.<br>1 | 山工 <b>27</b> 0<br>) 土製品(土器 , 瓦)・ 陶磁器 ············· |   |  |
|         |  |   | 42   |
| 3       | 3) 古墳時代の土器   |   | 42   |
| Ⅱ. ∄    |  |   | 42   |
| ш. о    |  |   | 12   |
|         | 插回   | 目次                                      |  |
|         | 1412   | 口外                                      |  |
| Fig. 1  | 箱崎遺跡調査区位置図3  |   | SK095, SK631, SK618 · 617 · · · · · · · 23 |
| Fig. 2  | 箱崎遺跡第52次調査地点周辺図5                                   | Fig 24                                  | SK054, SK018, SK106, SK125,                |
| Fig. 3  | 第52次調査区位置図5  | 1 18.2 1                                | SK131, SK047( · 598), SK722( · 665),       |
| Fig. 4  | 調査区全体図(遺構分布図)6                                     |   | SK086, SK06624                             |
| Fig. 5  | 調查区基本土層図7  | Fig 25                                  | SK019, SK430, SK098, SK406,                |
| Fig. 6  | 下面遺構分布図8   | 11g.20                                  | SK076, SK122, SK045, SK301, SK104,         |
|         | SD091·SD011, SD022平面図 ·······10                    |   | SK105, SK506, SK075, SK620 ·······25       |
| Fig. 7  |  | E: 9C                                   |  |
| Fig. 8  | SD091·SD011(1)土層図·断面図 …11                          | Fig.26                                  |  |
| Fig. 9  | SD011(2), SD022断面図①~④ ·····12                      | D! 05                                   | SK361)                                     |
| Fig.10  |  | Fig.27                                  |  |
| Fig.11  |  | Fig.28                                  |  |
|         | 平面図·断面図 ······15                                   | Fig.29                                  |  |
| Fig.12  |  | Fig.30                                  |  |
| Fig.13  |  | Fig.31                                  | SK006, SE610, SK803(1)·SK004出土             |
| Fig.14  |  |   | 遺物32                                       |
| Fig.15  | SK025平面図・断面図17                                     | Fig.32                                  | SK803(2), SK025, SX001, SK016出土            |
| Fig.16  | SK029平面図・断面図18                                     |   | 遺物33                                       |
| Fig.17  | SK512, SK612, SK615, SK100,                        | Fig.33                                  | SK432, 080, 102, 023, 599, 401,            |
|         | SK033, SK432 ·····18                               |   | 096, 095, 100, 012, 010, 003(A), 020,      |
| Fig.18  | SK082, SK015, SK016, SK00519                       |   | 195, 025(2), SD091(4)出土遺物35                |
|         | SK017平面図·断面図19                                     | Fig.34                                  | SK723, 407, 408, 406, 020(2), 403,         |
| _       | SK802 (102B), SK102 (A), SK080,                    | 8                                       | 032, 054, 086, 096, 125, 095, 631,         |
| 8       | SK024, SK021, SK64120                              |   | 016(2), 175, 104, 106, 506, 069, 618,      |
| Fig 21  | SK003 (A), SK401, SK012, SK010,                    |   | 099, 017, SD091(5)出土遺物···········37        |
| 1 1g.21 | SK192, SK096, SK100 ······21                       | Fig. 35                                 | その他土坑、柱穴、包含層出土遺物 38                        |
| Eig 22  |  | _                                       | 石製品(石臼その他), 博, 銅製品 …39                     |
| rig.22  | SK195, SK002, SK727, SK723,                        |   | 古墳時代の土師器ほか41                               |
| E; 02   | SK020, SK599, SK097, SK022 ·······22               | rig.57                                  | 白項时1Vの工師的はか41                              |
| r1g.23  | SK407·408·403, SK099, SK023·051,                   |   |  |
|         |  |   |  |
|         | 本文中写真  | (Ph.)                                   | 目次   |
| T01 - 1 |  |   |  |
|         | 南西隅土層 (Fig.5-②) ················7                  |   | 調査区西側遺構検出状況(北東から)…9                        |
| Ph.2    | 調査区西側調査状況(北から)9                                    | Ph.4                                    | 調食区 果側遺構検出状況 (南から)9                        |

#### I. はじめに

#### 1. 調査に至る経緯と調査の経過

平成18 (2006) 年 3 月27日付で、中原俊治氏より、東区箱崎一丁目1925番 1、1927番他地内における 共同住宅建設工事に関して、文化財保護法に基づく事前審査申請書が福岡市教育委員会文化財部埋蔵文 化財課に提出された(事前審査番号17-2-1244)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡(分 布地図番号34-2639)に含まれており、周囲の発掘調査および確認調査の成果から、埋蔵文化財が存在 する可能性がきわめて高いと判断され、予定される工事内容はこれに影響を及ぼすことが懸念された。 したがって申請者に対し、申請地における埋蔵文化財の内容等を把握するための確認調査の実施を要請 し、協議の結果、平成18年 4 月18日に確認調査を行うことになった。

確認調査の結果、申請地中央やや東側のトレンチにおいて、地表下-150cmで遺構を確認した。ところが、確認調査時点での申請地は屋根付き駐車場であったたため、申請地の広さの割には確認調査の掘削範囲の設定に制限が生じていた。したがって、遺構密度や遺構の遺存度、遺構検出面の深さの傾斜などについて十分な情報を得ることができず、発掘調査を行う場合の調査期間や費用の積算を行うにはやや不十分な状況であった。そのため申請者側と協議を行い、再度の確認調査を行うことになった。2回目の確認調査は平成18年5月2日に行った。2回目の確認トレンチは申請地東端に南北に長く設定し、その結果地表下-120cmにおいて遺構を検出した。この結果、遺構密度は比較的濃密であることが予想されるなどの成果を得ることができた。これら2回の確認調査の結果を受け、埋蔵文化財第1課(平成18年度より組織変更)と申請者およびその関係者との間で協議を重ね、記録保存のための発掘調査を行うことで合意を得た。平成18年6月12日付けで、中原俊治氏を委託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書が福岡市教育委員会との間で締結され、平成18年6月19日から同年8月18日に本調査を行い、平成19年度に整理・報告を行うこととした。また本事業は中原俊治氏の個人事業であるため、国庫補助金適用要項に基づき、調査費用の一部について国庫補助金を適用することになった。

本調査は、平成18年6月15日より開始した。なお、契約上の本調査開始日は6月19日からとしていた が、協議の結果、重機による表土除去と、委託者側の協力による廃土搬出を6月15日から行うことにな った。6月19日に調査機材の搬入と現場作業を開始し、調査を本格的に開始した。6月下旬から7月上 旬にかけて遺構検出を行ったが、この間は梅雨で降雨日が多く、作業の進展に遅れを生じた。7月に入 り遺構掘削と記録作業を進行させたが、検出遺構は予想よりもさらに濃密な様相を示し、掘削および図 化記録作業にかなりの手間を必要とした。7月下旬から8月初めにかけて遺構の写真撮影、全景撮影を 行った。しかしこの時点(7月末)で、遺構の図化記録作業が一部しか終了しておらずさらに時間を要 すること、下面の一部にさらに遺構が存在し調査を要すること、また廃土処理の都合上(土置場が不足 のため)から要調査範囲の一部を土置場にせざるを得なかったが、この部分の調査を廃土移動後に必要 とすることから、当初の本調査終了予定日であった8月18日に調査作業を終了させることは困難な状況 となった。このため、調査期間の延長を要請する必要が生じ、委託者である中原俊治氏や委託者側の工 事請負業者に対し状況を説明し、あらためて協議を行った。この結果、埋蔵文化財の調査についての深 いご理解を得ることができ、8月末を目途とする若干の調査期間の延長についての承諾を頂いた。その 後、8月中旬までに調査区のおよそ半分の調査を終了し、8月16日に廃土置場の一部としていた要調査 範囲の南東部分の遺構面までの廃土を除去し、この部分の調査を開始した。途中、8月18日に台風が接 近し現場を休止し、その後現場を復旧させるなどがあったが、順次調査作業を終了させ、平成18 (2006) 年8月28日に現場における調査作業を全て終了させ、機材等を撤収し、本調査を終了した。

なお、整理作業と報告書作成は平成19年度に行った。

#### 2. 調査の組織

調査委託 中原俊治

調查主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課

調查総括 埋蔵文化財第1課長 山口譲治

埋蔵文化財第1課調査係長 山崎龍雄(平成18年度)、米倉秀紀(平成19年度)

調査庶務 文化財管理課管理係 鈴木由喜

事前審查 埋蔵文化財第1課事前審查係 本田浩二郎(平成18年度)、上角智希(平成19年度)

調查担当 埋蔵文化財第1課調查係 久住猛雄

本調査においては、猛暑の中、多くの発掘作業員の方々の協力を得た。現場における遺構実測は、坂口剛毅(技能員)、藤野雅基(発掘作業員)、小松寛子(早稲田大学学生)、久住が行った。整理作業は、担当者の指示のもと、坂井かおり、宇野美嘉、宗近健太郎が行った。遺物の実測は、主に西堂将夫(技能員)、池崎譲二(埋蔵文化財第1課)、平ノ内武史(別府大学大学院)、久住が行った。中世から近世の遺物に関しては、池崎譲二のほか、田中克子(埋蔵文化財第1課調査員)、上方高弘(埋蔵文化財第1課調査員)からご教示を受けた部分がある。最後に、本調査に至る協議および条件整備、隣接マンションの一室の調査事務所としての利用、さらに本調査期間の延長などについて、委託者である中原俊治氏、仲介者である(株)まつい工務店の松井喜久治氏の深いご理解とご協力を得た。これら関係各位の方々に対し、特に記してあらためて感謝申し上げたい。

#### 3. 遺跡の立地と歴史的環境 (Fig.1)

箱崎遺跡は、多々良側河口の博多湾岸に形成された南北にのびる古砂丘上に立地し、10世紀前半建立の筥崎宮を中心に営まれた集落が、古代以来現在まで連続する遺跡群である。最近は弥生時代後期から古墳時代の遺構・遺物も検出され、古代・中世・近世まで続く複合遺跡である。推定範囲は南北1.2km、東西0.5kmにおよぶ集落遺跡であり、中世の様相は「都市」遺跡であるといえる。

博多湾岸に形成された「箱崎砂層」と呼称される古砂丘は、東区箱崎から、博多区堅粕、博多部、中央区天神、荒戸を経て、早良区百道まで至り、自然科学的所見から縄文時代晩期には形成されたとされておいる。これらの砂丘は旧河道や砂丘間の鞍部により画されており、画されたそれぞれの微高地上には、北側から西側に向かって、箱崎遺跡、吉塚本町遺跡、堅粕遺跡群、博多遺跡群が連なって形成され、さらに背後の砂丘列には吉塚祝町遺跡、吉塚遺跡群も形成されている。本遺跡はこれら古砂丘上の遺跡群の北端にある遺跡であり、西側を博多湾、東側を多々良川水系の宇美川に画されている。箱崎遺跡の砂丘の東側は、かつて中世までは入江(潟湾)が博多湾から湾入しており、中世には「箱崎津」と呼ばれた港として機能していた。現在でもこの旧潟湾が存在した範囲は比較的低い標高の土地となっている。

Fig. 1 は現在までの本調査および試掘調査で確認された砂丘面の標高を基に旧地形の等高線を推定した図に現在の地図を重ねたものである(詳細は福岡市埋蔵文化財調査報告書第852集『箱崎22』を参照)。これによると現在の筥崎宮付近に旧地形の最高所を含む高まりがあり、これを頂部として砂丘の尾根が南北に延びていることが分かる。ただし筥崎宮から約200m付近では、浅い谷部が東西から入り込み、尾根部が狭くなるなっている(27次の南側)。これより南側では今のこところ調査事例が少ないが、遺構が薄くなるようである。しかし、砂丘東側のJR鹿児島本線沿いの砂丘縁辺部では、遺跡南端から北端まで遺構が分布している。この遺構分布状況は、上記の潟湾沿いに存在した「箱崎津」との関連が考えられる。そのほか、砂丘尾根線前後の箱崎遺跡中央部は、調査事例はまだ少ないものの、試掘調査事例などから遺構が濃密に分布していることが推定される。52次調査は、砂丘の最高所に近い部分にあり、やはり濃密な遺構分布が認められた。また最近は、遺跡群の北端である36次においても濃密な遺構が確

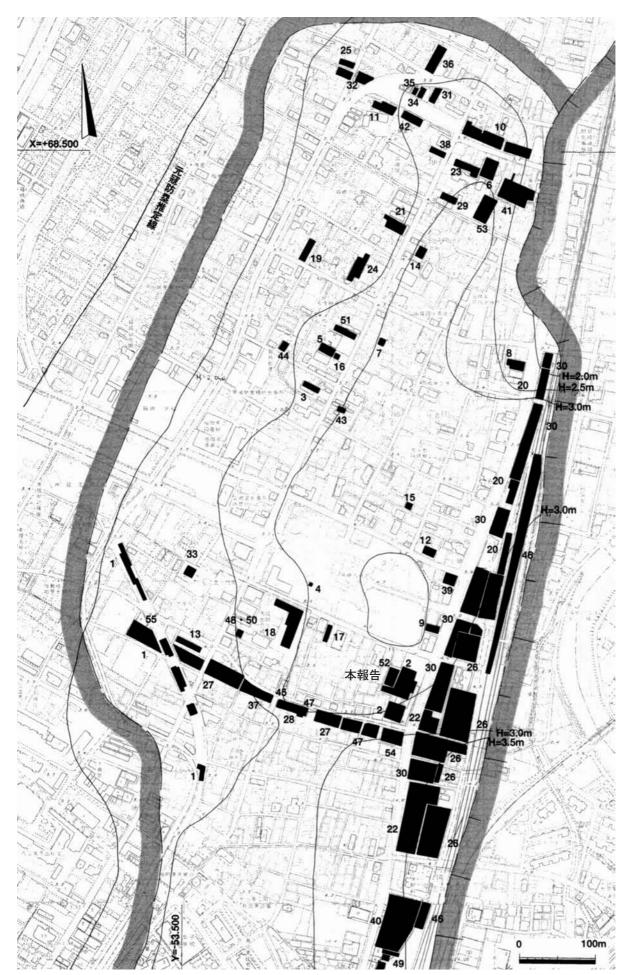


Fig. 1 箱崎遺跡調査区位置図(1/5,000)

認されるに及び、古砂丘尾根がさらに北側に続き、遺跡も延びる可能性が高いことが判明している。

箱崎遺跡の歴史的画期としては、まず筥崎宮の創建があげられる。同宮は延長元年(923年)に穂波郡大分八幡宮から遷座して創建されたと伝えられる。永承6年(1051年)には石清水八幡宮の別宮となるが、保延6年(1140年)には一時大宰府の所領となっている。権門社寺との結びつきは、畿内系土器の出土や瓦などの遺物からも窺うことができる。文治元年(1185年)には再び石清水八幡宮からの補任がなされている。この間、仁平元年(1151年)には大宰府検非違使所の官人らが博多とともに箱崎の宋人大追補を行っている。この12世紀半ばには、『宮寺縁事抄』の記録により、博多と箱崎に多くの宋人が居住し、また両地区に1,600軒以上の家屋が存在したことが伝えられるが、11世紀から12世紀にかけて博多遺跡群や箱崎遺跡の遺構が増大して「都市」化していること、貿易陶磁器の出土量が膨大になることなど、日宋貿易の隆盛を示す状況が発掘調査により判明しており、その記録を裏付けている。箱崎は博多ともに貿易商人である宋人が居住し、博多に次ぐ対外交易の拠点であった。『宇治拾遺物語』や『今昔物語』にも、11世紀前半に筥崎宮の神官が宋人と交渉し多大な商利を得ていたことが伝えられている。

文永11年(1274年)の元寇(文永の役)には、筥崎宮が焼失したことが伝えられ、箱崎一帯も被災したことが分かる。発掘調査においても、12世紀後半に形成された焼土層が検出される場合があり、記録と合致する可能性がある。文永の役の後、再度の蒙古襲来に備え元寇防塁が築かれるが、箱崎の海岸線沿いにおいても建治2年(1276年)に薩摩国の分担により防塁が築かれる。ただし現在では箱崎地区の防塁は現存せず、推定線においても遺構がほとんど検出されず、その後の都市化により防塁が存在した海岸線最前列の砂丘がほとんど削平されてしまい、また石材も再利用のためかほとんど運び出されてしまったものと考えられる。至治3年(1323年)に沈没したことが判明した韓国新安沖の沈没船からは、「筥崎宮」銘木簡が出土し、筥崎宮は14世紀前半(鎌倉時代末期)においても大陸との交易拠点の一つとして存在していたことが分かる。以後の中世後半期(14世紀半ば~16世紀末)においても、『海東諸国紀』や『筑紫道記』、『宗湛日記』などに箱崎(筥崎)の地名が散見され、海上交通の要所や箱崎松原はじめとする名勝地として名を残している。

箱崎遺跡ではすでに50次を超える調査が実施されている。最近の調査により、弥生時代から古墳時代の様相も明らかになってきた。ここでは、本調査でもやや多くの古墳時代遺物が出土していることもあり、これまであまり注目されなかったこれらの時期について詳しく触れておきたい。弥生時代の最も古い遺物は、6次の磨製石斧や20次の刻目突帯文土器がある(弥生時代初頭~前期)。中期の遺物も散見し、さらに後期前半の壺(30次13区)や後期後半の壺(22次5区)もある。これらは後世の遺構への混入などがほとんどであり、本来の遺構が不明確である。遺構としては、後期初頭の甕棺墓30次16B区ST-2005がある。

古墳時代初頭の II A期 (久住1999) になり初めて遺構と遺物が明確となり、以後継続する。22次 4 区 SK-0021・0025壺棺墓、26次 6 区のSO-054円形周溝墓、ST-056・ST088甕(壺)棺墓、22次 8 区SX-330壺棺墓などが II A期 (布留 0 式併行期) である。これらのうち、壺(甕)棺墓は報告により「後期中頃」や「終末期」とされる場合があるが(22次 4 区、22次 8 区)、土器製作技法の系統の吟味を踏まえた型式的な位置からは全て II A期に下るものであり、それらの時期比定は誤りである。そのほか古墳時代前期の遺構や遺物が、8・10・20・22・26・30・40・46・52次などにあり、周溝墓や甕(壺)棺墓、竪穴住居などが検出されている。韓半島系陶質土器・瓦質土器・軟質土器(8・52次)や、東海系 S 字状口縁甕(40・52次)、播磨型庄内甕(8次)、西部瀬戸内系布留甕(8次)、畿内北西部(摂津?)系布留甕(8次)、北東四国系壺(26次の壺棺墓、40次19区 1 号墳の二重口縁壺の1点)、播磨系壺(22・26次



Fig. 2 箱崎遺跡第52次調査地点周辺図(1/1,000)(※上が北、座標は日本測地系)

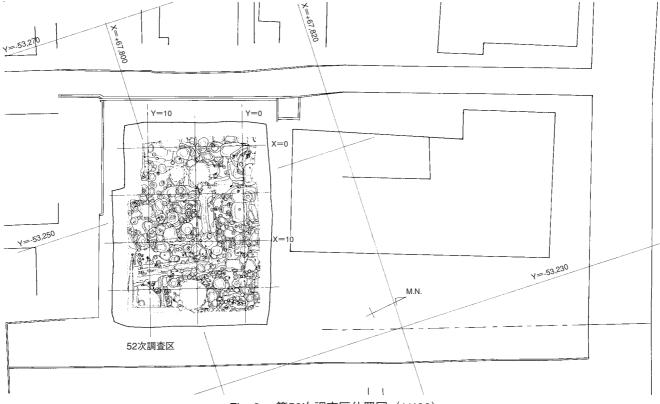


Fig. 3 第52次調査区位置図(1/400)

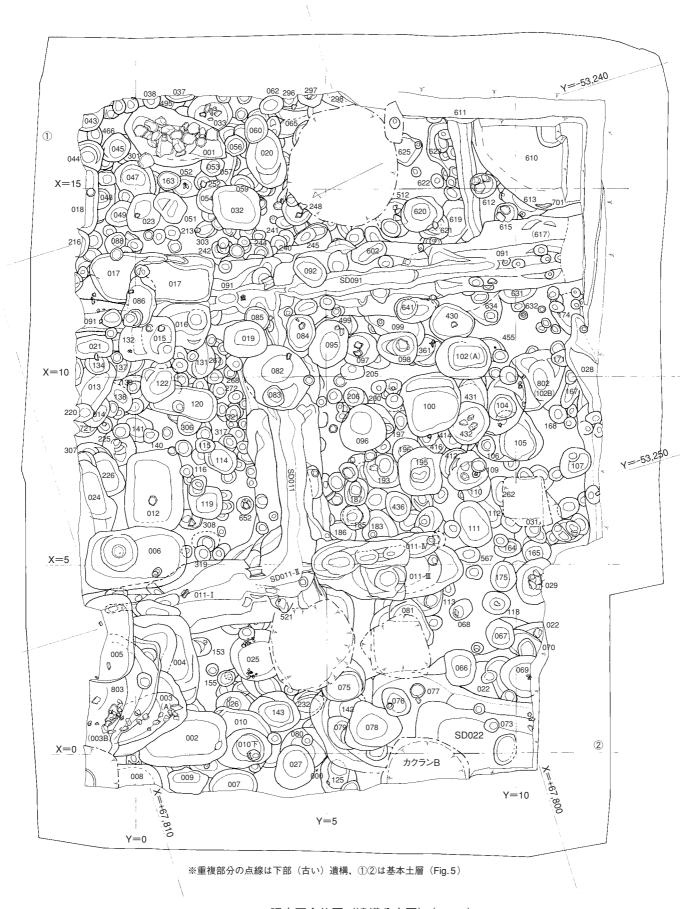


Fig. 4 調査区全体図(遺構分布図)(1/100)

の壺棺墓はその可能性)、北陸系 甕(46次)なども出土しており、 このような外来系土器が搬入(一 部は在地生産か)される状況は、 西新町遺跡や博多遺跡群を代表と する当該期の博多湾岸の遺跡群と 同じ様相を有しており、当時の交 易拠点の一つであったと考えられ る(久住2004)。また、飯蛸壺の 集中出土や石錘などもみられ(8 次)、漁撈や海上交易を生業とす る海人集団の居住が考えられる。

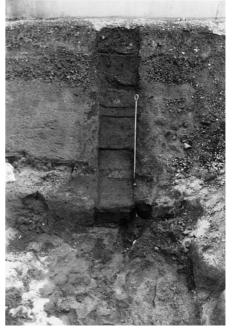
博多湾岸の砂丘上の遺跡は古墳時代前期前半に遺構が増大した後、前期後半(IIIA期)以降に規模を縮小する傾向にある。これは、当時の朝鮮半島および日本列島内の政治状況の変動とそれに関わる対外交易システムの変化(久住2007)、砂丘の形成再開(寒冷化)といった環境変化(甲元眞之2007)

2 4.40m 0 2 ※①・②の位置は 3 3 Fig. 4 参照 ~7+9(漸移)(9') 12 土屋① (調査区北東隅) 0. (バラス、上部はアスファルト) 1. バラス ガレキ+砂(近現代) 3 里褐色~暗褐色シルトナ 炭ガラ・ 近代遺物含む 土層② (調査区南西隅) 8. 暗褐色砂 (9層より暗褐色強い) 4. 黒灰褐色~暗灰褐色シルト土 1. 緑灰色バラス 9. 暗褐色 (~黒灰褐色) 砂質シル 3 ・ 4 近世以降耕作土層か 2. 粗砂+ガレキ+石炭ガラ, 暗褐灰色 卜十時苗褐色砂 5. 黒褐色砂 (~砂質シルト) (+黄色 7+9扇(漸移) 砂 砂間層)+灰黄色シルト・にぶい黄褐 3. 石炭ガラ (多) +バラス+粗砂+ガ 10. にぶい黄色~黄灰色砂+暗褐色 色砂、遺物含む レキ(少), 黒灰褐色砂 6 にぶい褐色 (~黄褐色) 砂+里褐色 2 · 3 近代感十 11 里褐色砂質シルト (SD022上層 砂、(酸化鉄・酸化マンガン沈澱) 4. 暗褐灰色砂 (~砂質シルト) +淡黄 検出面) , 遺物多い 7. にぶい褐色~黄褐色 (十暗褐色砂) 12. 黒褐色砂質シルト, 炭含む, 遺 白色粗砂 8 暗褐色砂+(暗い) にぶい苗褐色砂 5. 暗褐色砂 (~砂質シルト) . 耕作土 物少し含む 13. 暗褐色砂(十暗黄色砂) 杭状木質痕跡 9. 暗黄褐色~にぶい黄褐色砂 6. 暗褐色砂質シルト, 暗黄褐色砂, 遺 14. にぶい黄色砂 (十暗褐色砂) 10. にぶい黄褐色砂 (~暗黄褐色砂9) 物少し含む、耕作土か 15. (ややにぶい) 黄色~浅黄色砂 7. 黒灰褐色砂質シルト+暗黄褐色砂 11. にぶい黄色 (~浅黄色) 砂、間に褐 (粗砂),地山砂 色~黄褐色砂の間層、風成砂 耕作土か、遺物わずか 12. 明黄橙色~浅黄橙色砂(やや粗い砂) 1m

Fig. 5 調査区基本土層図(1/40)

などの複合的要因が背景にあると考えられる。その後の古墳 時代中期には、生活遺構(集落)がほとんど営まれなくなる ものが多い。これは砂丘上に住みにくくなるという環境変化 の影響が大きいかと推測されるが、箱崎遺跡は例外的遺跡の 一つで、その後も継続している。同様に継続する博多湾岸の 砂丘上にある他の遺跡には、生の松原遺跡(西区)、吉塚遺跡 (博多区)、御床松原遺跡 (志摩町) などがある。古墳時代中 期の遺構・遺物には、8次(中期初頭)、30次16区SC2001・ 2003 (中期中頃·中期末TK47期)、40次19区 1 号墳 (TK208期 前後、全羅南道系陶質土器短頸壺あり)・SK51 (中期前半)・4 基の小石室、46次20a区SK03(中期初頭、阿羅伽耶系陶質土器 高坏あり)などがあり、古墳や竪穴住居、土坑が検出されて いる。後期にも遺構が存在し、40次19区2号墳(TK10~TK43 期)、20次SC133·140(MT15期·TK10期)、30次SC066 (MT15期) などがある。以上の古墳時代の遺構はほとんどが、 砂丘尾根列より東側の潟湾に向かって傾斜する緩斜面上に立

11 - 12 地山砂



Ph. 1 南西隅土層 (Fig. 5 - ②)

地している。その後の $7\sim9$ 世紀の遺構・遺物は、むしろ意外に僅かとなり空白に近い。これは博多遺跡群や堅粕遺跡群などの遺跡の消長とは異なっている。

筥崎宮が創建される10世紀の遺構・遺物は2・22・26・30・40次など筥崎宮の東側に多く検出されて

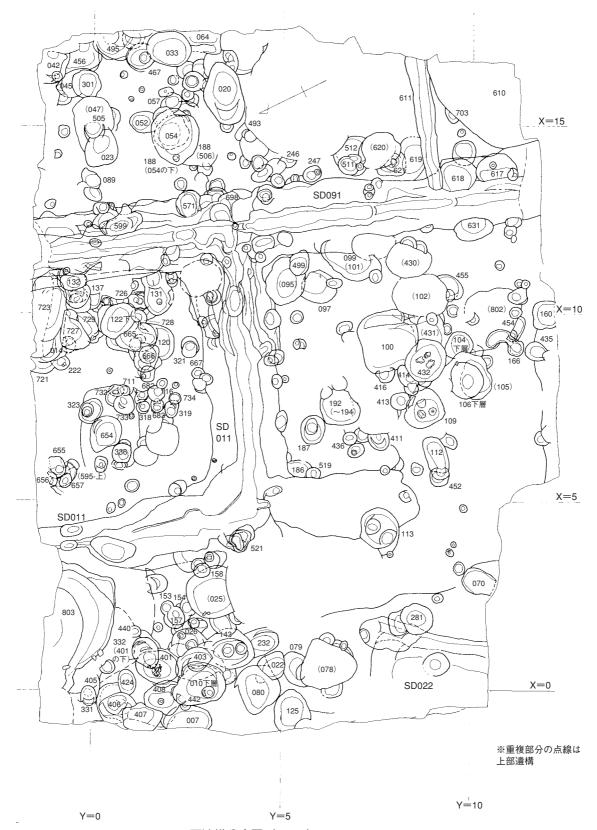


Fig. 6 下面遺構分布図(1/100)※一部上面遺構も記載している。

おり、今でこそ筥崎宮の参道は西側の博多湾に向かって延びているが、当初は東側の潟湾に推定される港に延びていたのではないかと想像されるあり方である。11世紀代以降には遺構の検出範囲や遺物量が増大し、井戸の掘削も盛んとなる。12世紀以降には砂丘尾根線全域とその西側にも遺構が進出し、すでに述べたような対外交易拠点でもある港町として広く「都市」化したと考えられる。箱崎遺跡における中世の遺構の概要については、これまでの『箱崎』の報告書を参照されたい。

#### 〈参考文献〉

久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』 X IX / 久住2004「古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人』大阪府立弥生文化博物館/久住2007「博多湾貿易の成立と解体」『考古学研究』第53巻第4号/甲元眞之(編)2007『砂丘形成と寒冷化現象』平成17年度~18年度科学研究費補助金研究成果報告書



Ph. 2 調査区西側調査状況(北から)(手前礫群はSD003)

### Ⅱ.調査の記録

## 1. 調査地点の位置 (Fig. 2, 3) と 基本層序 (Fig. 5)

本報告の52次調査地点は箱崎遺跡の中央部、筥崎宮南側に近接する位置にある。粕屋合同庁舎建設に先立って行われた2次調査地点の西側隣接地にあたる(Fig. 2,3)。周囲標高は西側3.9~4.0m、東側4.1~4.3mを測る。敷地西側の道路面標高は3.4mと一段低い路地となっており、旧砂丘列間鞍部か古い街割の区画大溝の名残りであろう。

調査区西側では標高2.5m前後、東側では3.0m前後で砂丘上面となり遺構を検出した。調査区東側では砂丘上面まで地表下1.3m前後、西側では1.8mで風成砂による砂丘上面となる。砂丘上面までは、地表下は近代以降の盛土、その下は推定近世以降の耕作土となり、その下部で中世遺構が検出されはじめる(Fig. 5)。この中世遺構の検出上面は、砂丘上面より上部であり、西側においてその砂丘上面とのレベル差が大きくなる。つまり遺構面(遺構検出面)は、本来は2面が設定できる。今回は事前の試掘調査で遺構面が不明瞭であったため、砂丘上面の1面の



Ph. 3 調査区西側遺構検出状況(北東から)



Ph. 4 調査区東側遺構検出状況(南から)

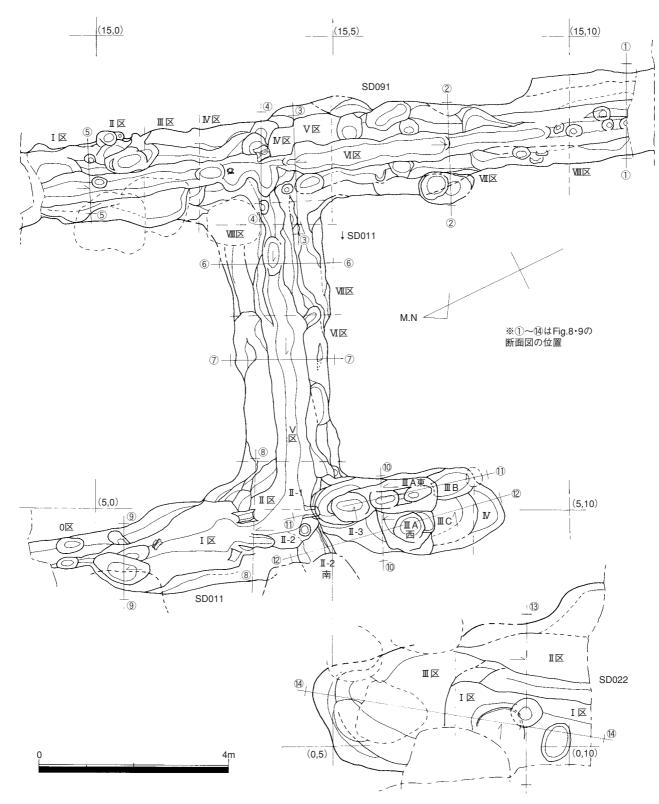


Fig. 7 SD091 · SD011, SD022平面図(1/80)

みを想定した積算で調査に臨んでいる。それはいた仕方ないことであるが、今後はこの周囲については 2面の遺構面が存在する可能性があることを念頭に対処すべきであろう。本調査でもこのような遺構面 の存在から一部範囲に「2面」を設定して調査を行ったが(Fig. 6)、その一つの結果として調査期間を 延長せざるを得なくなってしまった。

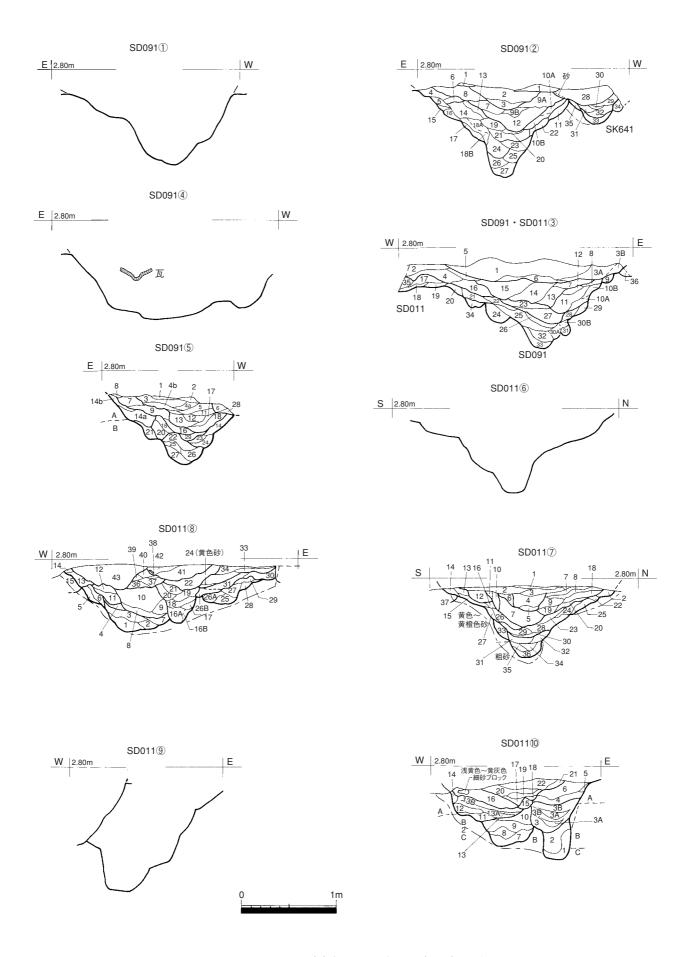


Fig. 8 SD091・SD011(1)土層図・断面図(1/40)※注記はP.11

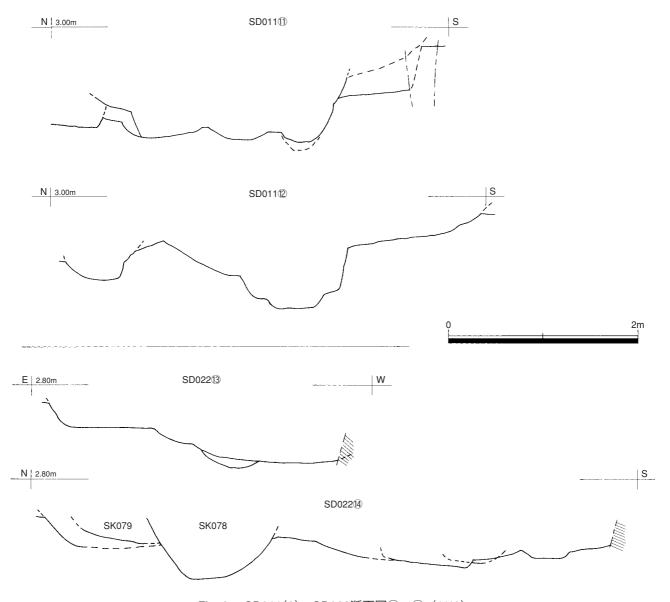


Fig. 9 SD011(2), SD022断面図①~⑭ (1/40)

52次調査の東側に隣接する2次調査では、筥崎宮創建直後の10世紀後半から15世紀までの遺構が検出された(Fig.2,3)。 礫敷を伴う建物地業が検出されているが、これは中世の筥崎宮の絵図に描かれた「赤幡坊」の建物跡と推定されている。また屋敷地の区画を示す10世紀から15世紀までの溝が検出されている。遺物(土師器および貿易陶磁器)は13世紀代が最も多いと報告されている。そのほか、瓦類が比較的多く出土しており、この一画は、中世当時は筥崎宮の一部であった可能性が高い。本報告の52次地点も2次地点と同方向の区画溝があり、位置的にも同様に筥崎宮の一画であった可能性があろう。

#### 2. 調査の概要

遺構分布はきわめて濃密な状況であった(Fig.4)。これは一つには、すでに述べたように 2 面分の遺構を 1 面で調査していることがあるが、いずれにしても非常に多くの遺構が認められた(Ph.3, 4)。

調査区南西側と中央に計3本の南北溝(SD091、SD011、SD022)が走り、中央2本の南北溝は中央の東西溝(SD011)で連結され屋敷地区画溝となり、調査地南縁にも東西溝(SD028)が走る。西側は旧地形が低くなり、この一部(南西側)にも幅広の南北溝がある(SD022)。その他、土坑50以上、

#### SD091 - VI区南 土層 Fig. 8 - ②

- 1. 暗褐 (黒褐) 色砂質シルト, 粗砂少し含む, 灰色シルト粒子 1. 暗褐 (黒綱) 色砂質シルト、粗砂少し含む、灰色シルト粒子含む、しまりあり、整地層か 2. にぶい暗褐色砂質シルト (砂質シルト) 〜黒褐色 (8より黒い)、焼土粒、炭粒少し含む、遺物多い 3. 黒褐色砂質シルト(中精褐色砂) (2より黒い) 炭粒少し 4. 暗褐 (灰) 色砂質シルト〜砂、にぶい暗黄褐色砂少々混入 5. 黒褐色砂質シルトト60%十暗褐色砂十暗黄褐色砂 6. 黒褐色砂質シルトはぶい黄橙色、黄褐色砂 7. にぶい黄褐、黄褐色砂質シルト

- 10% +暗褐色砂 40% 8.暗褐色砂 (やや黒い) ~砂質シルト (十暗黄褐色砂), 炭粒
- 少し、一部にぶい黄灰色砂 9. 94. 黒褐色砂質シルト (十暗褐灰色砂質シルト少々)、炭粒 少し遺物があり 9B:94+7層、黒褐色砂十暗黄褐色砂20%
- 10. (上部) 暗黄褐色砂〜黒褐色砂 (シルト+砂) 10. 黒褐色泥質土 (9層) +黒褐色砂+暗黄褐色砂

- 11. 黄褐色砂に暗褐色砂が混入10% 12. 黒褐色砂質シルト十泥質シルト にぶい黄褐灰色砂少し 13. 暗褐色砂質シルト(十暗黄褐色砂) 14. 暗褐色砂質シルト(一暗褐色砂) + 黄色がかった暗褐灰色砂,
- ラミナ(暗黄褐色砂+にぶい黄褐色砂30%) 15. にぶい黄褐色砂に暗褐色砂が混入 16. 黄褐色砂に褐色〜暗褐色の汚れ10%以下

- 19. 暗褐 (灰) 色砂質シルト (やや黒い) +暗褐色砂~暗黄褐
- 20. 暗褐色砂+(暗) 黄褐色砂(にぶい黄褐色), にぶい黄褐色 砂主60%
- 21. 黒褐色砂質シルト (~暗褐色砂) に暗黄褐色砂が混入 22. 暗黄灰色砂に一部黄褐色砂が混入 (暗褐色砂60%+にぶい 苗褐色砂30%)
- 23. 暗褐 (灰) 色砂~暗褐色砂に暗黄褐色砂~褐色砂30%, 24
- 24. 暗黄褐色砂十暗褐 (灰) 色砂 暗褐色砂60% (~にぶい褐

- 24. 晴寅韓巴砂十晴積 (灰) 巨砂 暗褐巴砂60% (〜にぶい稗 色砂やマ用砂) 十晴貴40% 25. 暗褐色砂十暗黄褐色砂 24より暗い 粗砂主体 26. 晴貴褐色砂70%+晴褐色砂20%+黄褐色砂 粗砂主体 7. 晴褐色砂-1時貴褐色砂 にぶい黄褐 (〜暗黄褐色砂) +黒褐・暗褐色砂20〜30%
- \*\*昭和2015-2075-2076 28. 暗褐 (5%) 色砂質シルト 黒褐灰〜暗褐色砂〜砂質シルト、 粗砂含む (暗黄褐砂まで) 29. 暗褐色砂に黄褐色砂が混入 にぶい黄褐色30% +暗褐色
- 30. 暗黄褐色砂+黄褐色砂(にぶい黄褐色砂) 暗褐色砂30%
- 31. 暗褐色砂70%以上 (80%) +暗黄褐色砂20% 32. 暗褐色砂60~70%+黄褐色砂(にぶい黄褐) 20~30%
- 33. 暗褐色砂60%+黄褐色砂40% まだら状
- 34. 黄褐色砂に褐色砂汚れ 35. 黄褐色砂に暗褐色砂汚れ
- I 層群:1~3層, Ⅱ 層群:7~10, 12層, Ⅲ層群:4, 6, 13, 14, 19~23層, Ⅳ層群:5,15~18,24~27層

#### SD091 - V区北側土層 Fig. 8-3

- 1. にぶい暗褐色砂質シルト〜黒褐灰色砂質シルト, 粗砂含む (〜暗褐色砂)、やや黒い 2. 暗褐色砂+暗黄褐色砂(やや砂質シルト気味)
- 3. 暗褐色砂質シルト+暗黄褐色砂 暗褐色砂~砂質シルト主
- ,にぶい褐色(黄褐色砂)+暗褐色砂
- 4. 暗褐灰色砂質シルト+ (暗) 黄褐色砂, (暗褐~黒褐色砂質 シルト+黄褐色砂まだら
- 5. 暗褐灰色砂+黄色砂 にぶい黄色~黄褐色砂に暗褐色砂 6. 暗褐灰色砂質シルト+にぶい暗黄褐色砂 5とほぼ同じ 7. 暗褐色砂質シルト 暗褐色砂質シルト(十暗黄褐色砂)
- 8. 暗褐 (灰) 色砂+暗黄褐色砂 にぶい黄褐色砂+暗褐色砂 9. 黄褐色砂 にぶい黄褐~にぶい黄橙色砂に褐色砂汚れ 10. (やや明るい) 暗褐色砂質シルトに暗黄褐色砂が混入
- 10. 暗褐色砂質シルト主 (暗黄褐色砂少ない) 11. 暗褐灰色砂質シルト~ (黒い) 黒褐〜暗褐色砂質シルト+ 暗黄褐色砂少し
- 哨責機包炒少上 12. 暗褐 (灰) 色砂質シルト (~にぶい褐色砂・暗黄褐色砂+ 暗褐色砂質シルト), 11・13層より明るい 13. 暗褐色砂質シルト+暗黄褐色砂質シルト,やや黒いが11・ 14層より (暗) 褐色気味
- 14億より(吨) 7年12人(ボント) 14、にぶい暗褐灰色砂質シルト 黒褐(灰) ~暗褐色砂(砂質シルトまじり) 十暗黄褐色砂 シルトまじり) 十暗黄褐色砂 15、暗褐(灰) 色砂質シルトに一部暗黄褐色砂が混入,14層より
- 15. "明るい、(褐色気味) 明るい (褐色気味) 16. (やや暗い) 暗褐 (灰) 色砂質シルト 15より黒い 黒褐色 砂質シルト + 暗褐色砂+ 暗黄褐色砂
- 17. 褐灰色砂質シルト にぶい黄褐灰色 (暗黄褐色) 砂に暗褐
- 18 にぶい暗黄褐色砂+暗褐灰色砂
- 10. にふい・明日代日ビリア・明日代ビリ 19. 18層より明るい時黄褐色砂(にぶい黄褐色砂)(十褐色砂) 20. 黄褐色砂(にぶい黄橙色砂)に暗褐色砂の汚れ少し 21. 暗黄褐色砂+暗褐色砂質シルト少し

- 22. 暗褐 (灰) 色砂+にぶい黄褐色粗砂 23. にぶい暗黄褐色砂 (暗褐色砂)
- 24. 暗黄褐色砂+黄褐色砂 (粒子大), かなり粗い砂、汚れ暗黄
- 福巳 5. 暗褐 (灰) 色砂 (質シルト?) 十暗黄褐色砂に一部黒褐色 砂質シルト, (にぶい黄褐色砂・暗黄褐色砂に黒褐〜暗褐色 砂汚れラミナ)
- 26. 暗褐色砂~暗褐灰色砂(暗褐色砂+にぶい黄褐色砂) 27. 褐灰色砂質シルト にぶい褐色砂+暗褐色砂(やや砂質シ
- ルト) + (にぶい暗黄褐色砂) 28. にぶい暗褐色 (~黒褐色) 砂質シルト+暗黄褐色砂少し 29. 暗褐灰色砂+黄褐色砂主体 (やや粗砂)

- 30. 暗褐色砂+ (暗) 褐灰色砂+ (にぶい) 黄褐色砂 黄褐色 砂主体

- が王体 30, やや暗褐〜黒褐の汚れは多い (31層の続き?) 30, 暗褐色砂+ (にぶい) 黄褐色砂 (租少) 31, 暗黄褐色砂 (ーにぶい 黄褐色砂) (にぶい褐色汚れ) 32、黄褐色砂、やや明るい、やや相砂 (にぶい褐色汚れ少し) 33、にごった (浅) 黄橙色粗砂 (褐色汚れ)
- I 層群:1, 3, 6層、II 層群:7~16 (,5) 層、II 層群:20~23, 26~29層、IV層群:24, 25, 30~34層、V層群:2, 4 (,5), 17 ~ 19.35層

#### SD091 - I 区北側土層 Fig. 8 - ⑤

- 1. 黒褐色砂質シルト (十暗黄褐色砂), しまりややあり 2. 1層と同じ (下辺に黄色砂)
- 黒褐色(砂~)砂質シルト~暗褐灰色砂質シルト(十暗黄 褐色砂)
- 4. 黒褐色(砂~)砂質シルト左下部に暗黄褐色砂混入
- 4. 黒褐色砂+(上)暗黄褐灰色砂(下)にぶい黄灰褐色砂 4a. 黒灰褐色砂+にぶい黄褐~暗黄褐色砂 5. 黒褐色(砂~)砂質シルト~暗褐灰色砂質シルト(~砂)
- (土腔苗褐色砂)
- 黄褐色砂主体十暗褐灰色砂汚れ 黒褐色砂下部に暗黄褐色
- 砂混入 シルト質 7. 暗責褐色砂十にぶい浅黄色砂 8. (暗) 黒褐色 (やや灰色気味) 砂質シルト+ (暗) 黄灰褐色砂 9. にぶい (暗) 黄褐色砂

- 15. にぶい(暗) 黄褐色砂(十褐色砂), 20層より暗い
- 16. (ややにぶい) 明黄褐色砂+にぶい褐色砂カずか 17. にぶい暗褐灰色砂質シルト, (暗褐色砂・砂質シルト+に ぶい苗褐色砂若干)
- ふい 貝特也砂百十7) 18. 暗黄褐色砂質シルト,(暗褐色砂質シルト+暗黄褐色砂+ にぶい黄色多い 19. 暗褐灰色砂十にぶい黄褐色砂

- 20. にぶい黄褐色砂 (15より明るい) 21. 黄褐色砂+暗褐灰色砂
- 22 にぶい(暗) 黄褐色砂に明黄褐色砂が混入
- (黄色がかかった) 暗褐灰色砂 (暗褐色砂汚れ) 明黄褐色砂, 26層より明るく汚れ少ない

- 黄褐色砂 (にぶい色、明るめ) (ごくわずかに褐色砂含む)
   にぶい明黄褐色砂・暗褐色砂の汚れ
   明黄褐色砂 ( 暗) 褐灰色砂の汚れ少し、ややしまる
   黒褐色砂質シルト+にぶい黄褐色砂,暗黄褐色砂
- A. 明黄橙色砂
- B. ややにぶい明黄橙色粗砂

#### SD011 - VI区西側土層 Fig. 8 - ⑦

- 1. 黒褐色砂 (~暗褐色砂) (~砂質シルト), 遺物を包含する 2. 暗褐~暗黄褐色砂, 遺物を包含する
- (にぶい) 明黄褐色 (~にぶい黄色) 砂+黒灰褐色砂質シルト (ラミナ波状堆積)
- 4. 黒灰褐~暗灰褐色砂質シルト+にぶい黄色砂粗砂(黄色砂 現状)、遺物を包含する 5. 黒灰褐色砂質シルト+にぶい黄色砂少し 6. 暗褐(~暗黄褐)色シルト質(砂) +暗褐色砂・(暗)黄色砂

- . 暗褐色砂質シルト (〜黒暗灰褐色砂質シルト) +黄色砂 . 暗褐色砂質シルト+にぶい黄色砂
- 9. 暗黄褐~にぶい暗灰褐色砂+暗褐色砂質シル
- 10. 杭状の木質痕跡か?, 暗褐色砂(~暗褐灰色砂)+黄色砂
- 11.17層と同じ 12. 暗黄色砂+黒褐・暗褐色砂ラミナ
- 13. (黒) 暗褐灰色砂質シルト+黄灰色砂・黄色砂 14. 明黄色砂+暗褐色砂少し
- 15, 25階と同じ (崩落的に汚れ) 16. 暗褐色砂+(暗)にぶい黄色砂 17. 暗褐〜暗褐灰色砂(〜砂質シルト), 炭粒・遺物含む、黄色
- 砂少1 18. 黒暗褐色シルト質砂+黄色・灰黄色砂ブロック 19. 17層より砂質で明るい, 暗褐灰〜暗黄褐色砂+にぶい黄色
- 砂
- 20. にぶい黄灰褐色砂+黄色砂+ (暗) 褐色砂 21. (やや) 粗い砂, にぶい黄色~にぶい灰黄褐色砂+黒灰色
- 砂汚れ 22 暗褐灰~暗黄褐灰色砂+黄色粗砂
- 23. 黒褐色砂質シルト+暗黄色砂・黄褐色砂 24. にぶい暗黄色砂+暗黄褐色砂・暗褐色砂
- 25. (ペースペーペース・ロット・ロック (相か) に黒色・褐色砂の汚れ 26. 黒褐色砂質シルト+暗黄色砂 (17よりシルト質で黒い) 27. (暗) 褐色砂+暗黄色砂
- 28、にぶい黄色砂・暗黄色砂+暗褐色砂(黒褐色砂)やや少 29、黒褐〜黒暗褐色砂質シルト+暗褐色砂(十暗黄色砂) 30、黒褐色砂(やや砂質シルト気味)主体層(間層)
- 33. 暗褐色砂十黒褐色砂質シルト砂少十暗黄色砂 32. にぶい暗黄褐色砂十黒褐色砂 (砂質シルト) 少 33. 暗褐 (〜黒暗褐色) 砂主体+にぶい (暗) 黄色砂

- 34. 35層と似るがにぶい黄色砂が主体 35. にぶい黄色砂 (淡黄灰褐色砂) 十暗褐色砂 (やや多), (暗 褐~黒褐色砂)
- 36 わずかに淡褐色及び黒色砂粒の汚れ含む明黄色砂(粗砂) 37. 別遺構, 周囲よりわずかに褐色気味の黄褐色配

#### SD011-II区北側土層 Fig. 8-8

- 1. 褐色砂主+にぶい黄褐色砂 (暗黄褐色砂) +明黄橙色砂20
- 2. しまり甘い、明黄橙色砂+にぶい暗黄褐色砂汚れ 3. しまりややあり、暗褐 (〜暗黄褐) 色砂+にぶい黄褐色砂 少し、4層より暗黄褐色気味

- 4. 暗褐色砂十にぶい黄褐色砂わずか(20%).(8層同じで続
- きかも) , にぶい黄褐色砂 (しまり甘い) +明黄褐 (黄橙) 色砂 . 褐色砂+ (にぶい) 黄褐色砂, 5層より全体に暗い (より褐 色砂が多く強い)
- . 2層に似る,ややにぶい明黄橙~明黄褐色砂+褐色砂汚れ
- 8 しまりややあり、暗褐色砂+淡黄褐色砂わずか(にぶい暗 8. しまりでであり、暗雨と野すが寒雨に野のカナバ (いっ・m 黄褐色砂) (4層に続くか) 9. 暗褐色砂 (しまりややあり) 十暗黄褐色砂わずか 10. しまりあり, 暗褐 (〜黒暗褐灰) 色砂・砂質シルト, 遺物や
- やあり、やや黒灰色気味 11. 暗褐〜黒暗褐灰色砂十暗黄褐色砂、しまりややあり
- 12. しまりあり, 黒暗灰褐色砂質シルト十暗黄褐色砂 (10層の 続きか) 13. 暗褐色砂 (しまりややあり) +にぶい黄褐 (黄灰褐) 色砂
- 14. 黒暗褐色砂 (十暗黄褐色砂)15. にぶい (暗) 黄褐色砂 (粗砂) ~にぶい褐色砂まじり, (別)
- 16. 暗褐色砂主+にぶい黄褐色 (~暗褐色) 砂. ラミナ互層
- 16B、暗褐色砂井明黄褐色砂,ラミナ堆積 17、にぶい褐色〜暗黄褐色砂+黄褐(黄橙)色砂40% 18、暗褐色砂+にぶい黄褐砂斑状20%強
- 19. 暗褐色砂に暗黄褐色砂~にぶい黄褐色砂 (15%) が全体に 19層に似るがにぶい黄褐 (~にぶい黄褐色)砂がやや多 (20)

- や粗砂、 遺物やや多い 23. (にぶい) 黄褐色砂十褐色砂汚れ
- 24. (32層に同じ) 25. 明黄橙~明黄褐色砂 (十暗褐色砂斑状汚れ)
- 26. にぶい黄褐色砂、暗黄褐色砂十明黄褐色砂 26B. 31層に近いか (26層とほぼ同じないし), 褐色砂十暗褐色
- 砂
- 25~29. 一見地山だが、しまり甘く汚れあり 27. 明黄褐 (黄橙) 色砂 (汚れわずか崩落砂)
- 28. 26と同じ (汚れ少ない)
- 29. 明黄褐色砂に暗黄褐色砂汚れ40% 30. 黒暗褐色砂+黄褐色砂・暗黄褐色砂まじる 31. 褐色砂+にぶい(暗) 黄褐色砂+暗褐色砂まじり
- 32. = 24層 (31層よりしまる), にぶい褐色砂+暗褐色砂 (+暗黄褐色砂), 遺物やや多い, 途中・中間に淡灰黄褐色砂のラ
- ミナ間層 33. 暗褐色砂 (~黒暗灰褐色砂) (砂質シルト), 炭粒やや目立つか, (十暗黄褐色砂)
- 34 暗褐色砂+にぶい黄褐色砂
- 34、暗褐色砂+にぶい資褐色砂 35、暗褐〜黒暗褐灰色砂 (十にぶい黄褐色砂) (別遺構) 36、にぶい黄褐色砂+にぶい褐 (暗黄樹) 色砂 37、暗黄褐色砂 (ヤヤにぶい色) , (暗褐色砂+にぶい黄褐色砂) 38、にぶい黄褐灰-浅黄褐(灰) 色砂 39、暗褐色砂+黄褐色砂斑状 40、暗褐色砂 (十暗黄褐色砂)

- 41. にぶい黄褐色砂+暗黄褐灰色砂+暗褐色砂, 遺物やや多い 42. 暗褐色砂+にぶい暗黄灰 (褐) 色砂, しまりややあり, 遺物
- やや多 43. 暗灰褐 (灰褐色気味) 色砂質シルト 炭粒あり, 遺物多い 上層①:13, 14, 22, 36~43層, 上層②:24, 29~34層, 下層 ①:16~21層, 下層②:25~28層, 下層③:1~12層 (, 下層

### ③上:8~10層)

- SD011-Ⅲ区北側土層 Fig. 8-⑩
- 浅黄橙色砂 (やや甘い) + (暗) 褐色砂汚れ少し
   にぶい黄褐色砂+(暗) 褐色砂,1層よりしまりあり
   黄橙色砂 (やや粗くしまり甘い)と暗黄褐~褐色砂 (しまりやあり)の互層ラミナ堆積 (3A-3B)
- A. ややしまりある, 暗黄褐色~にぶい褐色砂+にぶい黄橙 色砂, 遺物はない

- 3B. (にぶい) 黄橙色砂 (しまりやや甘い) 主体+褐色砂汚れ、 4. 暗褐色砂 (ややシルト質) + (暗) にぶい黄褐色砂 40% 5. 黄橙色砂に褐色砂の汚れ 6. にぶい黄褐(にぶい黄橙色)砂土褐色・暗褐色砂30%ラミ

7. (ややにぶい) (明) 黄橙色砂+褐色砂汚れ少し

- 8. 明黄檀砂 (十褐色砂汚れわずか) 9. (黒) 暗褐色砂 (砂質シルト) 40%+暗黄褐色砂30%+明黄 褐色砂・にぶい黄褐色砂30% 10. にぶい黄褐~暗黄褐色砂+暗褐色砂・褐色砂20% (全体と
- してにぶい褐色砂気味) +明黄褐色砂10%, 10~11層は漸
- 11. にぶい褐色砂 (~にぶい黄褐色砂) +明黄褐色砂30% 12. (黒) 暗褐色砂30%+ (にぶい) 褐色砂40%+にぶい黄褐色砂・明黄褐色砂30%
- 13. ラミナ・明黄褐色砂主体40%以上+にぶい黄褐色砂 (上半に多い) +暗褐色砂ラミナ10%
- 13A. 明黄褐色砂主体
- 13B にぶい黄褐色砂主体
- 14. 黄橙色砂 (十褐色砂汚れわずか) 15. 暗褐色砂+暗黄褐色砂で80% (以上) +にぶい黄橙色砂少
- 16. 褐色砂 (~砂質シルト) 主体, 黒褐色砂質シルト10%+暗

- 20, 暗黄褐色砂主体+暗褐色砂斑状30%+にぶい黄褐色砂20
- 21. 暗褐色砂+にぶい(暗) 黄褐灰色砂 22. 暗褐~暗黄褐灰色砂 (21より黄灰褐色砂含む), ややしま りあり、遺物多い 上層①:11~22層, 上層②:3~6層, 下層①:7~9層, 下層②:1·2層

表: Fig. 8 SD091・SD011土層図 土層説明

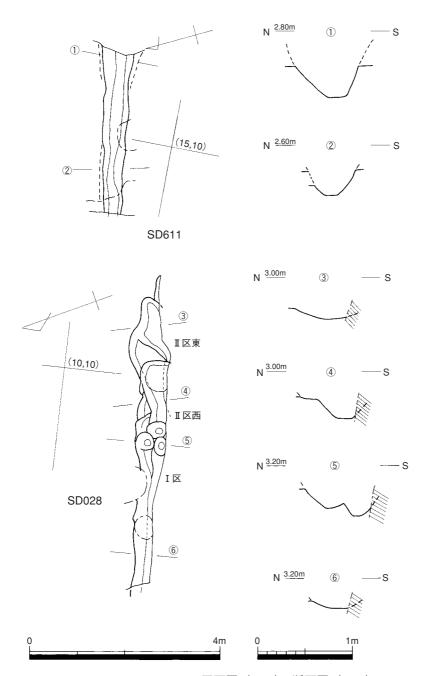


Fig.10 SD611, SD028平面図 (1/80)・断面図 (1/40)

井戸2、石組(石敷)遺構1、無数の柱穴、小溝を検出した。遺構の大部分は出土遺物から11~16世紀(古代末期~中世末期)であり、出土遺物は12~15世紀が多く(遺構の主体時期もこの時期幅であろう)、一部に古墳時代前期~奈良時代の遺物もあり、古い遺構も僅かに存在するようである。

出土遺物は、総量パンケース55箱 である。古代末期から中世末期まで の土師器、黒色土器、瓦器、瓦質土 器などの土器類および輸入陶磁器、 国産陶磁器が大部分を占める。近世 陶磁器も若干出土している。瓦類も 一定量出土し、軒丸瓦、軒平瓦、衾 瓦(雁振瓦)も少数みられる。他に 石製品、鉄製品、銅製品(銭貨など) がある。少数だが古墳時代前期~中 期の土師器、飛鳥~奈良時代の須恵 器も出土している。特筆すべきもの として古墳時代初頭の東海系S字状 口縁甕の口縁部片や、古墳時代前期 ~中期に併行する朝鮮半島系の瓦質 土器・陶質土器の破片がある。

3. 検出遺構 (Fig. 7~26)
1) 溝状遺構 (Fig. 7~10)
SD091・SD011 (Fig. 7, PL. 3-6, 4-7, 6-14~20, 7-21~24)

SD091とSD011は一連の区画溝である。遺物取上げや土層ベルトの設定のため、SD091は  $I \sim \mathbb{I} \times \mathbb{I} \times \mathbb{I} \times \mathbb{I} \times \mathbb{I}$  SD011は  $0 \sim \mathbb{I} \times \mathbb{I}$  (PL. 6 - 16)。この部分では、SD011側が浅くSD091側が深くなり縦断面が段状となるが、土層断面を観察する限り埋没過程が連続しており、両溝は切合関係にはない(Fig. 8 右上から 2 段目)。

SD091は調査区の東側をN-19~20°-Eの方位(以下の遺構記述は磁北が基準)で南北に走行する。 13.5m長以上で、検出面での幅140~220cm、検出面からの深さ70~100cm前後を測る。断面形は逆台形、または「V」字あるいは「Y」字を呈する(Fig. 8)。土層観察では単純なレンズ状堆積ではなく、何回かの掘り直し・溝浚えが想定できる。底面付近は幅40~50cm前後が箱状に深くなっている。遺物が上層から中層にかけて比較的多く出土している。V区中層上部から完形の衾瓦が出土している(PL.6-17)。

SD011は、調査区の西側をN-20°-Eで南北に走行する 0  $\sim$  IV区のSD011南北溝と、その中間の II 区か

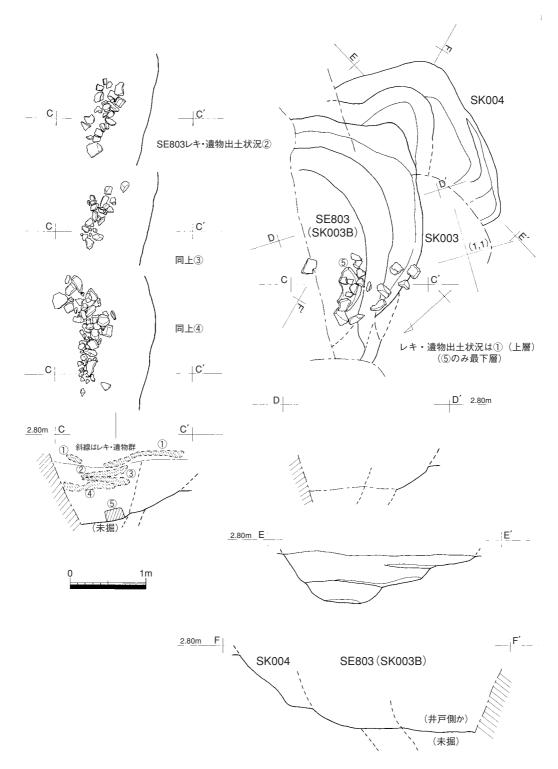


Fig.11 SK004, SE803 (SK003B+SK004下層) 平面図・断面図 (1/50)

らほぼ直角に分岐して(「T」字状となる)SD091の $\mathbb{N}$ 区へ連結していく $\mathbb{N}$ ~ $\mathbb{M}$ 区のSD011 $\mathbf{p}$ 西溝からなる。東西溝は $\mathbb{N}$ -69°- $\mathbb{N}$ -Wの方位である。東西溝と南北溝は切合関係ではなく、連続しているものと判断した。SD011はSD091と連結して全体として「 $\mathbb{N}$ -2、字状の区画溝をなす。

**SD011南北溝**は、10.1m長を確認したが、南側( $\mathbb{N}$ 区の南)は急に立ち上がり途絶え、北側の 0 区は幅が狭くなる。検出面の幅は狭くなる 0 区で65cm、他は $135\sim220$ cmを測る。各箇所の検出面からの深さは、 $70\sim110$ cmである。断面は $\mathbb{N}$   $\mathbb{N}$ 

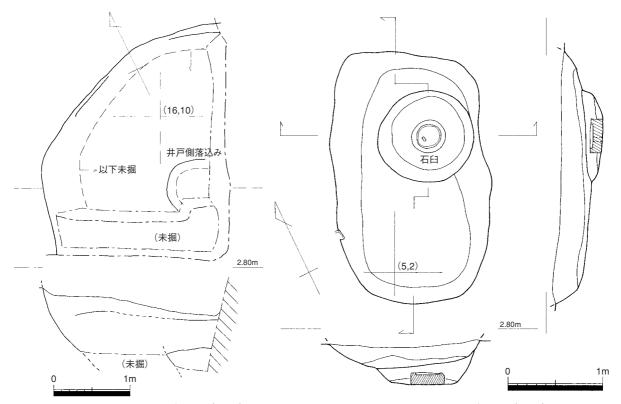


Fig.12 SE610平面図・断面図(1/50)

Fig.13 SK006平面図・断面図(1/40)

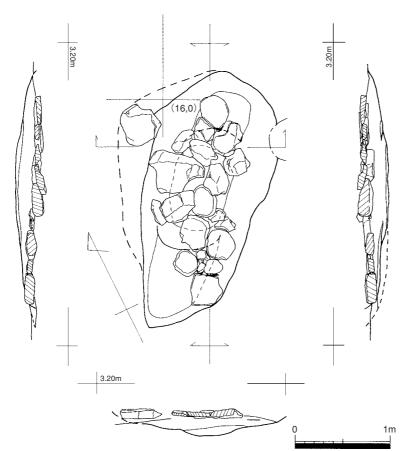


Fig.14 SX001礫敷遺構平面図・断面図 (1/40)

没した後にさらに浅い逆台形 の溝が掘削されるようである (Fig. 8-8・⑩参照)。このう ち最初の大きな掘り直しであ る細く深い溝は南側のⅢ区東 半から0区につながるようで ある。北端の0区ではこの時 期のみに溝が通るとみられ る。また、掘削途中での平面 的な検出状況では、下層途中 では Ⅱ-1・2 区の覆土を Ⅱ-3 区下層の覆土が切る様相が確 認できた (Fig. 9 - ⑩)。 つま り、本来はⅡ-1・2区から直 角に東へ屈曲する溝であった のが、下層までの若干の埋没 後に「南北溝」部分が南の Ⅲ・Ⅳ区側に延伸して掘削さ れたと解釈できる。

**SD011東西溝**は、SD011南 北溝とSD091を連結する溝で あるが、上記のように本来は、 SD011は II-1 区で屈曲するのみで南には延びなかったとみられ、溝底面がスムーズに南北溝から東西溝に移行する。東西溝は約 6 m長、幅は1.8~2.3 m、深さは60~85 cmを測る。 SD091との連結部は少し浅くなる。 SD011とは切合は認められなかったが、厳密には掘削当初から同時に存在したか疑問がある。溝の断面形は逆台形から V字状だが、底面付近が40 cm幅前後で箱状に深くなり、IY 字状にも見える。やはり土層観察から2回程度の大きな溝浚えがあると想定できる(Fig.8-⑦。なおSD011からは、特に上層~中層にかけて比較的多くの遺物が出土した。

**溝の時期**であるが、SD091・SD011ともに、 多少古い遺物も混入するが、下層に14世紀の 遺物があり、出土遺物から(Fig.27~30)、15 世紀前後、下限は16世紀まで掘り直しをしな がら機能したものとみられる。なお、SD091、 SD011の土層図・断面図はFig. 8 に掲載した (対応する写真は、SD091がPL.6-17~20・7-21、SD011がPL.7-22~24)。SD011は縦断面 図をFig.9 に掲載した。土層図の土層説明は 13頁に全て掲載した。

SD022 (Fig. 7, 9、PL. 2-4) 調査区西側縁 辺部南半で検出した幅広の溝。西側の立ち上がりは不明瞭で調査区外となる。検出面は東側で高く(西側で低く)、傾斜地に営まれた溝である。北側は立ち上がって途切れるが、南側はなお続いている。幅は北側で2m前後、南側で4.2mとなるが東側は一度浅いテラス状となってから西側へ落ちる(Fig. 9-⑤)。SD022は調査区敷地西側の路地が低いことと合わせ、古くからの砂丘の微地形を反映し、その鞍部を利用して掘られた溝と考えられる。埋没後に多くの遺構に掘り込まれている

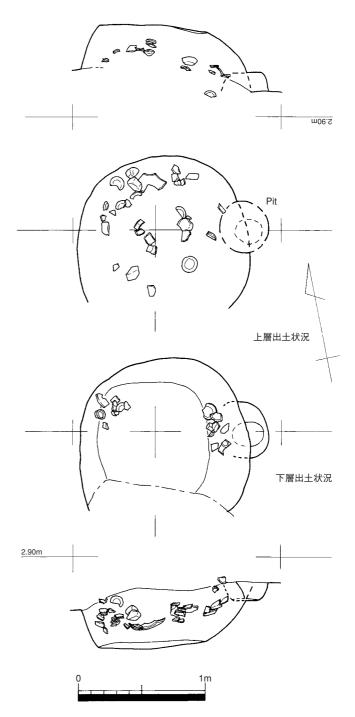


Fig.15 SK025平面図・断面図(1/30)

(Fig. 4)。出土遺物から、13世紀中頃~14世紀であるが、上層の埋没は15世紀頃に下るか(Fig.30)。

SD028 (Fig.10、PL 4-9) 調査区南縁部の東西溝。方位はN-69°-W。南側端は調査区外となるが、推定幅50~80cmの比較的小規模な溝。ただしこれは砂丘面での幅であり、本来の上面幅はこれより広くなろう。砂丘面(検出面)からの深さは10~25cm、一部30cmだが、これは幅と同様に本来はもっと深い。東側は浅く立ち上がって途切れる。方位はSD011南北溝と同じであり、一時期同時に存在した可能

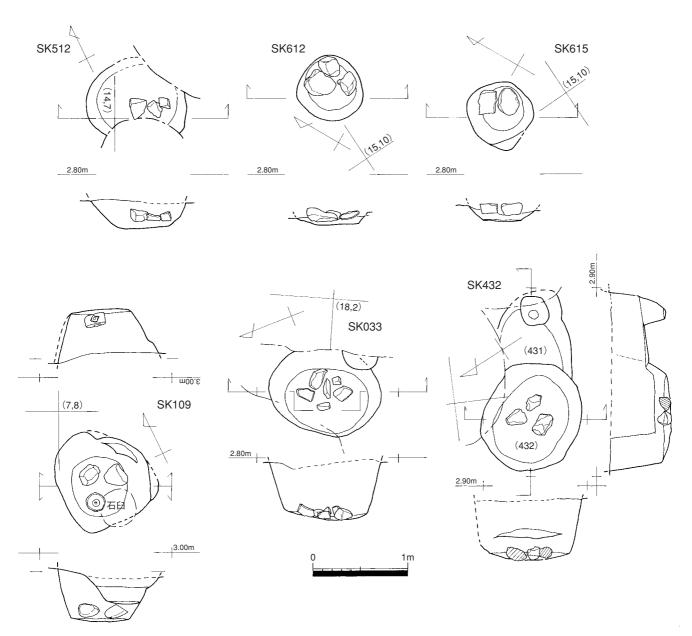
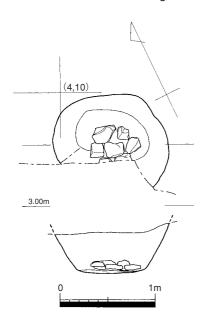


Fig.17 SK512, SK612, SK615, SK109, SK033, SK432 (1/40)

SD011などと同時期と考える。



来は60cm強の深さである。出土遺物は少ないが、12世紀前半のSE610を 切りこれより新しく、SD091に切られるもののSD091の西側に延びず、 SD091に直交することから、SD091の掘削当初(14世紀代)には共存した

2) 土坑・井戸(Fig.11~25)

く、調査区全体図(Fig. 4, 6)上での位置が分かりにくいと思われるので、

(埋没後、SD091上層再掘削時に切られた)可能性があると考える。

性がある。出土遺物は少なく、近世遺物もあるが混入の可能性もあり、

SD611 (Fig.10、PL.5-13) 廃土置場としていた調査区南東部で検出し

た溝。N-71°-Wの略南北溝。3.6m長検出したが東側はさらに延びる。検 出面での幅は45~65cmだが、東側の調査区壁では土層からより上のレベ ルでの幅が90cm前後と分かる。検出面から25~35cmの幅だが、同様に本

Fig.16 SK029平面図・断面図 (1/40)

以下、土坑および井戸などについて記述するが、遺構数がきわめて多

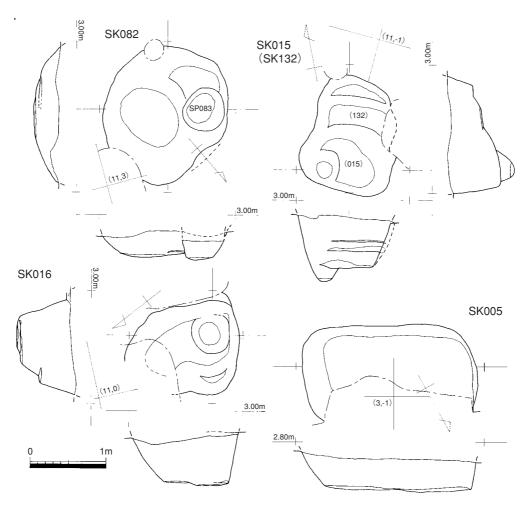


Fig.18 SK082, SK015, SK016, SK005 (1/50)

個別の各遺構図には調査 区内の任意座標点を記入 している。なお、編集上 の調整不足から遺構説明 と遺構図の頁がずれてし まっているが、ご寛恕さ れたい。

#### **SK004** (Fig.11)

SK003B(SE803)に切 られる235×160cm以上の 土坑。深さは70cm前後。

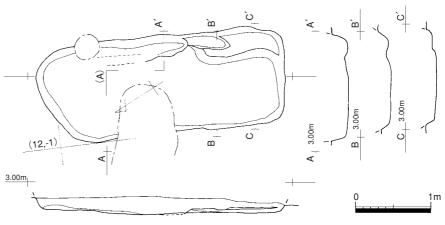


Fig.19 SK017平面図・断面図 (1/50)

当初はSE 803との重複が不明なまま掘削した。出土遺物 (Fig.31) から、13世紀後半~末であろう。

SE803 (Fig.11) 当初はSK003とした部分とSK004とした部分の下層がより新しい大きな土坑と判明し、別遺構とした (PL.7-28)。さらに北側に展開するが、調査区壁の崩落が懸念されたため、深さ105cmまでで掘削を断念した。さらに深く落ち込むため井戸 (SE) の可能性がある。推定径350cm以上である。SK004とSK003Aを切るとしたが、SK003Aの最上層の礫群とSE803最上層の礫群 (Fig.11-①) は同一の可能性もあり、その場合にはSE803埋没後に別の浅い溝(SD003?)があった可能もある。遺構の重複の認識が不分明なところがあり、出土遺物の帰属に一部混乱が生じている。Fig.11の②~⑤はSE803に確

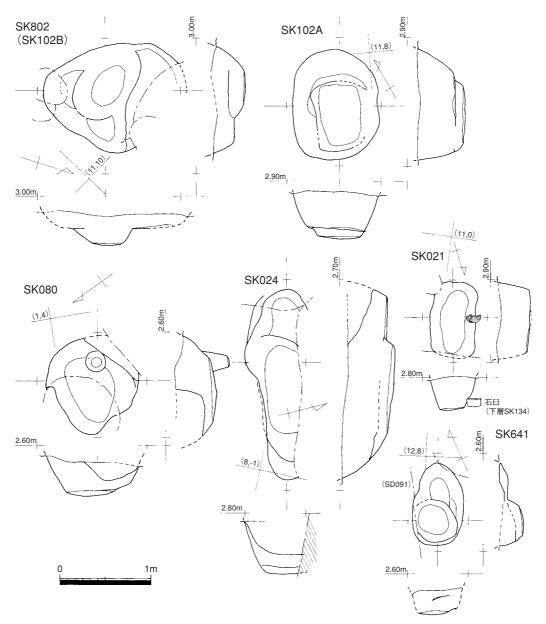


Fig.20 SK802 (102B), SK102(A), SK080, SK024, SK021, SK641 (1/50)

実に伴う。下層から石臼が出土した。上~中層に礫とともに遺物が多く出土し(①?、②~④)、瓦類が比較的多く含まれていた。出土遺物から(Fig.31, 32)、13世紀末~14世紀中頃である。

**SE610** (Fig.12、PL.5-13) 調査区南東部で検出。遺構の3/4が調査区外となる。復元推定径4~5m前後。上面からの深さ90cm前後で円周の推定中央部分に軟らかい覆土の落込みがあり、井戸側と推定した。この部分を若干掘削したところで崩落の危険性から以下の掘削を断念した。出土遺物から(Fig.31)、土師器の坏皿にヘラ切り底や丸底坏が多いが、糸切底が出現した12世紀前半の井戸と推定される。

**SK006**(Fig.13、PL.7-27)  $165\times225$ cmの不正長方形土坑。N-22.5°-E。深さ30cm前後で平坦面となるが、北側で $120\times130$ cmの円形落込みがあり、底面に石臼が置かれていた。この部分は深さ50cm。出土遺物に時期比定できるものが少ないが、SD011など周囲遺構を切り、16世紀代に下るか。

**SX001**(Fig.14、PL.7-25) 調査区北東で検出した石敷き遺構。上面が平坦な角礫を100×220cmの範囲で敷き並べるが、北側の一つだけが外れた位置にある。下部に280×140cmの不整形の浅い落込み(土坑)があり、礫上面からの深さは30cm。出土遺物は少なく、ヘラ切り土師器皿など古い遺物もあるが、周囲遺構を切り、15~16世紀であろう。また石敷きは何かの基礎構造かと考えられる。

SK025 (Fig. 15, PL. 7-26) 調 查区中央北西部 で検出した。南 側は攪乱で切ら れるが、径140cm 前後の円形土 坑。深さ60cm。 上層から下層に かけて遺物群の 廃棄がみられ、 上・下層に分け て取り上げたが ほぼ全て一括出 土とみてよい。 出土遺物からは (Fig.32)、13世紀 代の廃棄土坑。

SK029 (Fig.16) 径125×110

というよりは、

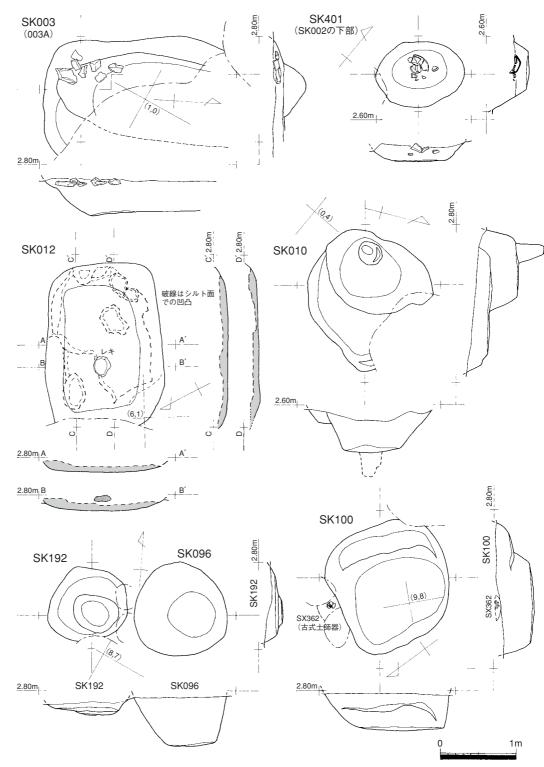


Fig.21 SK003(A), SK401, SK012, SK010, SK192, SK096, SK100 (1/50)

いずれも柱穴とすべきものか。

**SK512** (Fig.17) 推定90×105cm、深さ30cmを測る。底面からやや浮いて3つの礫が敷き置かれる。

**SK612** (Fig.17) 径70cm、深さ20cm (礫上面から)。3つの礫が置かれる。

**SK615** (Fig.17) 径68×72cm、深さ20cm。底面からやや浮いて2つの礫が置かれる。

SK109 (Fig.17、PL.8-32) 径100×110cmの不整円形土坑。深さ56cm。底面に僅かに浮いて3つの礫

が据え置かれる SK195 SK002 が、Fig.22うち (8,8) 1つは石臼の転 (0,0) 用である。 **SK033** (Fig.17) 破線は粘土上面の凹凸  $90 \times 120 \text{cm}$ 深さ65cmの楕 円形土坑。底面 (浅灰黄色粘土 に中小の礫が6 つ敷き置かれ (15,3)る。 SK020 SK432 (Fig.17) SK727 径120×100 · SK723 cmの楕円形土 727 坑。深さ66cm。 2.90m 727 底面に3つの礫 723 723 が据え置かれ (10,0) る。東側SK431 とは切合が不明 SK599 確なまま同時に 掘削してしまっ (SD091) 727 たが、本来は別遺 構である。SK431 \_<sub>[</sub>2.60m は深さ44cm、 SK097 (10,6) 東側がピット状 2.60m<sub>|</sub> B に深くなる。 723 SK432は出土遺 物から (Fig.33-SK022 1)、13世紀代か。 SK082 (Fig.18) ↑破線はシルト面の凹凸 165×185cm⊘ 不整楕円形土 坑。深さ38cm。

Fig.22 SK195, SK002, SK727, SK723, SK020, SK599, SK097, SK022 (1/50)

**SK015** (Fig.18、PL.8-31) 90~126×150cmの不整長方形土坑。深さ72cmだが、南西隅はピット状に深くなり深さ90cmとなる。南北を軸とする段掘りの土坑だが、大型柱穴の可能性もある。当初は北側の段掘りのテラス部分までをSK132として掘削している。

SP083が上から

切る。

**SK016** (Fig.18) 110~125×155cmの不整形土坑。深さ72cm。北側をSK015に切られる。南側底面が円形に凹み、土坑としたが大型柱穴の可能性がある。備前焼擂鉢片があり(Fig.32-37)、14世紀前後か。

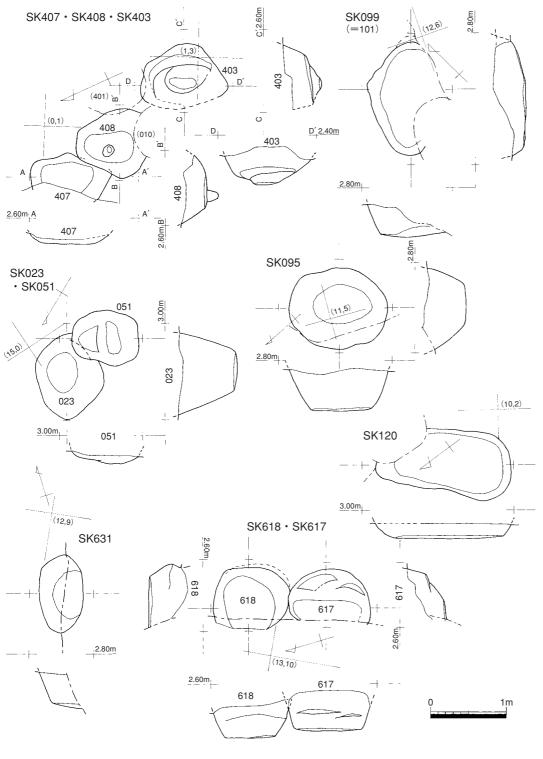


Fig.23 SK407 · 408 · 403, SK099, SK023 · 051, SK095, SK631, SK618 · 617 (1/50)

遺物の大部分はいずれのものかが帰属不明になってしまった。

**SK102** (Fig.20) 115×145cmの楕円形土坑。深さ65cm。上記のミスのために、出土遺物はSK802と区 別が出来なくなっている。

**SK080** (Fig.20) 122×127cmの略円形土坑。深さ56cm、一部ピット状に深くなる。

**SK005** (Fig.18) 230×推定130 cmの隅丸長方形 土坑。深さ55cm。 **SK017** (Fig.19) SD091∅ I ~ Ⅲ区埋没後に形 成された330× 120~130cmの不 整長方形土坑。 検出面からの深 さ25cm。底面東 辺は壁溝状の凹 みがあり、板壁 があった可能性 がある。古い遺 物があるが、 SD091との関係 から16世紀頃か。 **SK802** (Fig.20) はじめ「**SK102**」 としたが、後で次 OSK102 (102A) との遺構番号の 重複に気付いた ため、「102B」 とし、整理段階 で「802」とした 遺構。145×推定 190cmの不整楕 円形土坑。中央 が深さ46cmの落 込みとなるが、 周囲は25~35cm のテラス状とな

る。なお、出土

SK024 (Fig.20) 調査区外北側 にさらに展開す る推定65~95 cm(現状40~75 cm)×250cmの 溝状土坑。深さ 70cm、西側は 55cmとやや浅 い。

SK021 (Fig.20) 60×100cmの 隅丸長方形土 坑。深さ45cm。 下部壁面外から 石臼が出土した が、これは下部 遺構 (SK134) に帰属する。

SK641 (Fig.20) SD091を切る (Fig. 8 - 2) と みられる土坑。 68×108cmの不 整楕円形、深さ 35cmだが北側 はテラス状に浅 く15cm。

SK003A(Fig.21) SE803 (SK 003B) に切ら れると考えた溝 状土坑。155× 240cm以上、深

さ45cm。ただ

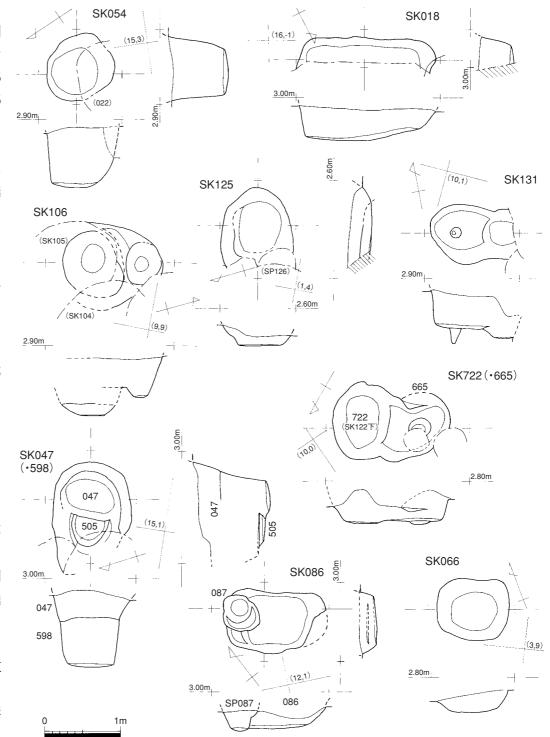


Fig.24 SK054, SK018, SK106, SK125, SK131, SK047 ( • 598), SK722 ( • 665), SK086, SK066 (1/50)

し上層の深さ15cmまでの礫群が伴う部分は、SE803上部の礫群に連続しており(PL.8-29)、SE803より新しいさらに別の遺構の可能性がある(SD003)。出土遺物は上下の2遺構?とSE803に帰属するものが完全に分離できなかった。瓦質火鉢(深鉢)があるが(Fig.33-31)、15世紀に下り、これは上層SD003に伴うか。下層SK003Aは、SE803より古いとすれば13世紀末以前となる。

**SK401** (Fig.21、PL.8-33) SK002の下部、「第2面」で検出した(Fig.6)。118×86cmの楕円形土坑。

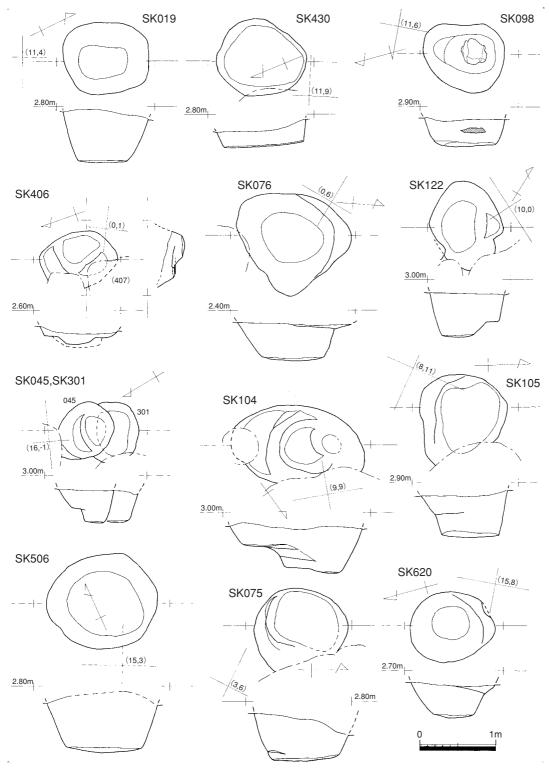


Fig.25 SK019, SK430, SK098, SK406, SK076, SK122, SK045, SK301, SK104, SK105, SK506, SK075, SK620 (1/50)

上端の一部は第1 面で検出できて おり、深さは第 1 面から50cm。 第 2 面レベルで 遺存度が高い瓦 質 擂 鉢 が あり (Fig.33-10)、13 世紀後半か。

#### SK012 (Fig.21)

156×220cm∅ 隅丸長方形土坑。 方位はN-64°-W。 深さ20cmの浅い 皿状の断面。底 面に黄灰色シル ト混じりの貼床 状の層がある。 そのシルト層上 面はやや凹凸が ある。出土遺物 は少ないが、図 示した遺物から は (Fig.33-19, 20) 12世紀後半 頃か。

#### **SK010** (Fig.21)

160×190cmの 不整円形土坑。 検出面が砂丘の 傾斜のため東側 が高いが、高い 方を基準として 深さ70cm、西側 底面はピット状

で深さ100cm以上となる。東半分は深さ30~35 cmと浅くテラス状になるが、あるいは 2 つの土坑の重複の可能性もある。出土遺物から(Fig.33-21~28)、13世紀後半頃か。

**SK192** (Fig.21) 100×110cmの不整円形土坑。深さ25cm。

**SK096** (Fig.21) 122×125cmの略円形土坑。深さ56cm。出土遺物から(Fig.33-14)、13世紀末~14世紀前半か。プラン・規模から大型柱穴の可能性もある。

**SK100** (Fig.21) 160×165cmの隅丸方形土坑。深さ50cmだが、東側は深さ22cmのテラス状となる。出土遺物から (Fig.33-16~18)、12世紀後半か。

**SK195** (Fig.22) 120×130cmの不整方形土坑。深さ54~65cmで中央が凹む。あるいは大型柱穴か。出土遺物 (Fig.33-33, 34) から12世紀代であろう。

**SK002** (Fig.22、PL.8-29) 150×232cmの隅丸長方形土坑。深さ34cmだが、底面から壁面に厚さ10~20cmの黄灰色粘土を貼っている。SK003に切られ、出土遺物は少ないが12~13世紀か。

**SK727** (Fig.22) SK723と重複するが、切合関係は不明瞭である (SK723が古いか)。74 (以上) × 100cmの不整形土坑。深さ44cm。

SK723 (Fig.22) 調査区北縁中央の「第2面」(Fig.6)で検出。東西265cm、南北130cm以上の推定隅丸方形土坑。深さは125cmだが、「第2面」からは90cm前後。遺構の大半が調査区外に展開するので不明確だが井戸になる可能性もある。西側掘方は段状になる。出土遺物から(Fig.34-1, 2)、土師器皿の底部へラ切り調整主体の12世紀前半までの遺構である。

**SK020** (Fig.22) 104×168cmの不整楕円形土坑。深さ82cm。出土遺物から(Fig.33-32、34-6)、12世紀前半か。

SK599 (Fig.22) SD091-Ⅱ・Ⅲ区の東壁面で検出。50×120cmの不整楕円形の溝状土坑。深さ80cm (SD091上面から)。出土遺物から (Fig.33-9)、12世紀前半までの遺構。

**SK097**(Fig.22) 径90cm前後の不整円形土坑。深さ40cmだが、上層の深さ15cmのところに2つの礫が据え置かれ、灰白色粘土(粘質シルト)がこれを覆っている。礫の上面は、粘土に何か有機物(繊維質?)のものが存

在した痕跡があった。あるいは何か の基礎構造か。

**SK022**(Fig.22) 130×146cmの 不整楕円形土坑。 深さ34cm。

#### SK407 (Fig.23)

調査区西部の 「第2面」で検出 (SK407・408・403 はPL.5-10,11参 照)。SK408に切 られる。推定70× 110cmの不整形土 坑。検出面からの 深さ15cm。出土 遺物から(Fig.34-3)、11世紀後半~ 12世紀前半。

(※→30頁へ)

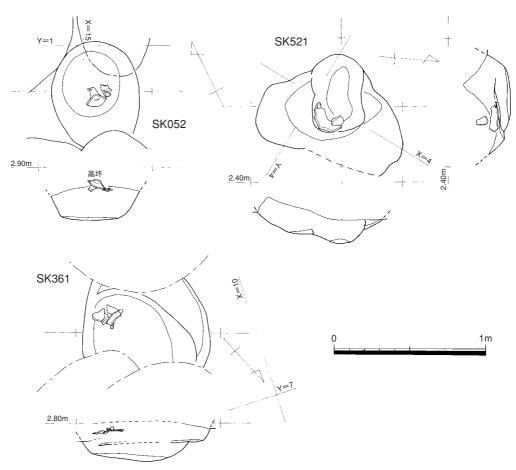


Fig.26 古式土師器出土遺構 (SK052, SK521, SK361) (1/25)

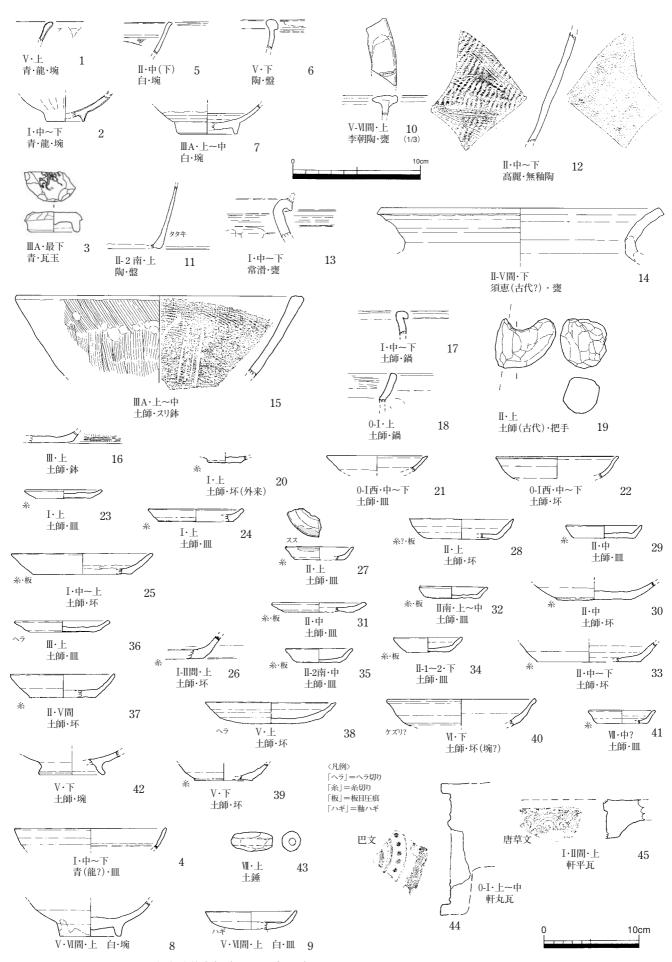


Fig.27 SD011出土遺物(1) (1/4、一部1/3) (※ローマ数字は掘削区を示し、上・中・下は層位を示す。)

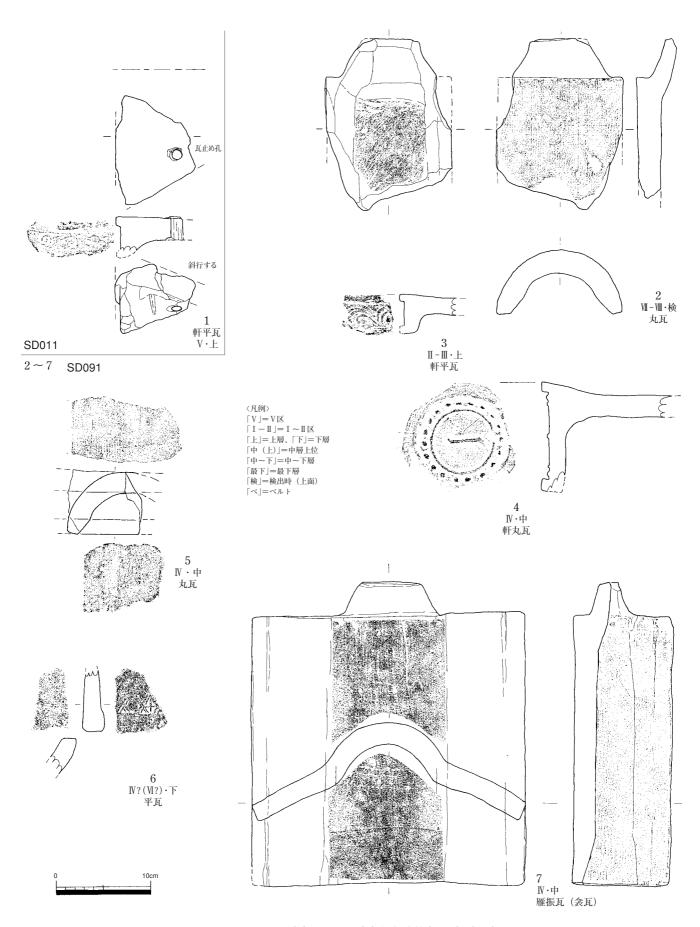


Fig.28 SD011(2), SD091(1)出土遺物(瓦類) (1/4)

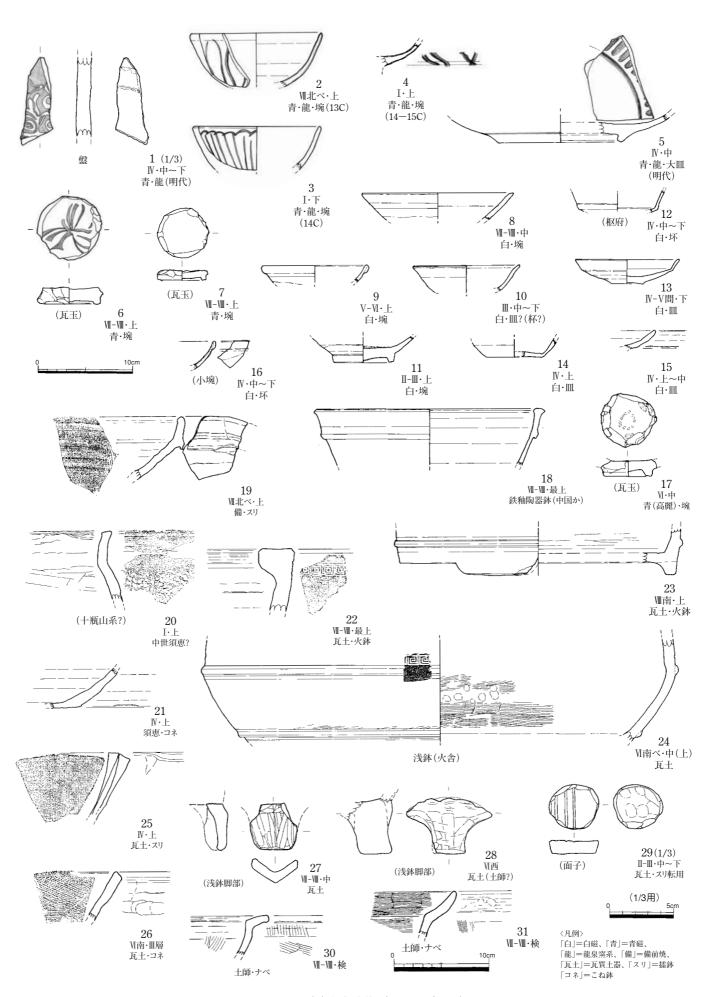


Fig.29 SD091(2)出土遺物(1/4、一部1/3)

**SK408** (Fig.23) 調査区西部の「第2面」で検出。80×推定98cmの不整円形土坑。深さ34cmだが、底面の一部がピット状となり深い。出土遺物から(Fig.34-4)、12世紀中頃か。

SK403 (Fig.23) 推定90×116cmの不整形土坑。深さ52cm。出土遺物から(Fig.34-7)、13世紀後半か。

**SK099** (Fig.23) 約160×推定110cmの不整楕円形土坑。深さ45cm。調査中、「SK101」とも付けたが、同一土坑なので整理した。出土遺物から(Fig.34-29, 30)、13世紀後半か。

**SK023・051** (Fig.23) SK023は90×115cmの不整楕円形土坑。深さ80cm。SK051に切られる。出土遺物から(Fig.33-8)、11世紀中頃~後半か。SK051は72×86cmの不整方形土坑。深さ18cm。

**SK095**(Fig.23) 108×130cm、深さ60cmの楕円形土坑。出土遺物から(Fig.33-15、34-23~25)、13世紀前半頃か。

**SK631** (Fig.23) SD091に西側を大きく切られる104×60 (以上) cmの楕円形土坑。深さ50cm。出土遺物から (Fig.34-26)、15世紀前後と思われ、SD091の埋没過程で一時切り、SD091再掘削で切られるか。

**SK618・617**(Fig.23) **SK618**はSK617を切るとみたが関係は微妙である。 $102\times82$ (以上)cmの楕円形土坑。深さ52cm。東側壁面がオーバーハングする。出土遺物から(Fig.34-36, 37)、16世紀以降に下るか。SD091に西側を切られると考えたが、上面で確認できなかっただけの可能性もある。**SK617**は、68(以上) $\times100$ cmの楕円形土坑。深さ52cm、東側はテラス状で浅い。SD091に切られるとみたが、SK618と同様に関係は微妙である。

**SK054** (Fig.24) 90×92cmの円形土坑。深さ80cm。遺物がやや多い。出土遺物から(Fig.34-10~17)、12世紀中頃~後半か。

SK018 (Fig.24) 調査区北縁東部で検出。44 (以上) ×184cmの溝状 (?) 土坑。深さ50cm。

SK106(Fig.24)  $132 \times 114$ cmの不整円形土坑。深さは南側で76cm、北側で54cmで、一つの遺構として掘削したが、二つの遺構の重複であろう。

**SK125**(Fig.24) 98×106(以上)cmの楕円形土坑。深さ30cm。出土遺物から(Fig.34-31)、14~15世紀か。

**SK131** (Fig.24) 65~80×110 (以上) cmの土坑。深さは西側で50cm (中央小ピット状で深い)、東側は64cmで、土坑 (または柱穴) 2 基の重複か。

**SK047** (Fig.24) 104×150cmの不整楕円形土坑。「第2面」以下をSK598とする。深さ86~102cmで、西側の底面の凹む部分は古い別遺構の可能性がある(SK505)。

**SK722** (Fig.24) 「第2面」の遺構。80~103×156cmの土坑。西側は深さ48cm、東側は44cm。2基の土坑 (・柱穴) の重複か。その場合、東側のSK722 (SK122の下部) と西側のSK665となる。

**SK086** (Fig.24) 86×134cmの隅丸長方形土坑。深さ28cm。SP087に切られる。出土遺物 (Fig.34-18~20) からは遺構の時期を明確にしえないが、SK017、SK091を切るとみられ16世紀以降か。

**SK066** (Fig.24) 83×96cmの隅丸方形土坑。深さ32cm。

**SK019** (Fig.25) 96×113cmの隅丸方形土坑。深さ70cm。

**SK430** (Fig.25) 102×120cmの不整円形土坑。深さ38cm。

**SK098** (Fig.25) 92×108cmの不整円形土坑。深さ40cm。中層に偏平な礫が落ち込む。柱穴か。

**SK406** (Fig.25) 調査区西部「第2面」検出。75×105cmの楕円形土坑。深さ35cm。北~西側がやや浅くテラス状となる。出土遺物から(Fig.34-5)、11世紀後半~12世紀前半。

**SK076** (Fig.25) 135×154cmの不整円形土坑。深さ50cm。

**SK122**(Fig.25) 98×118cmの不整楕円形土坑。深さ60cm。東側がやや浅くテラス状となる。

**SK045** (Fig.25) 74×76cmの円形土坑。深さ44cm。北側がやや浅くテラス状。柱穴か。(※→34頁へ)

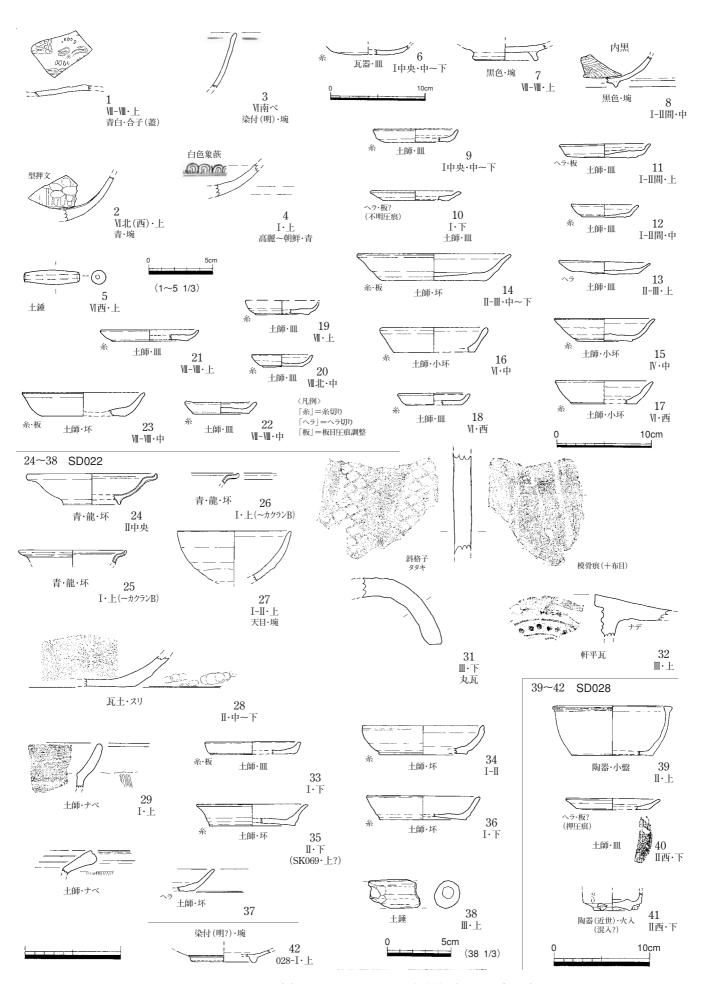


Fig.30 SD091(3), SD022, SD028出土遺物 (1/4、一部1/3)

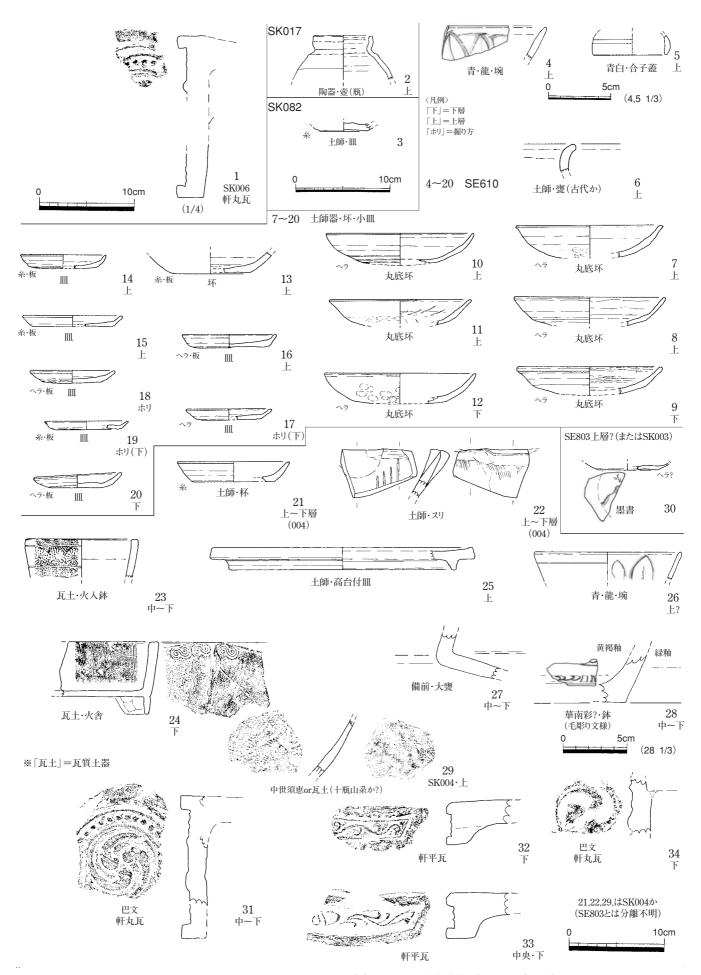


Fig.31 SK006, SE610, SE803 (1)·SK004出土遺物 (1/4、一部1/3)

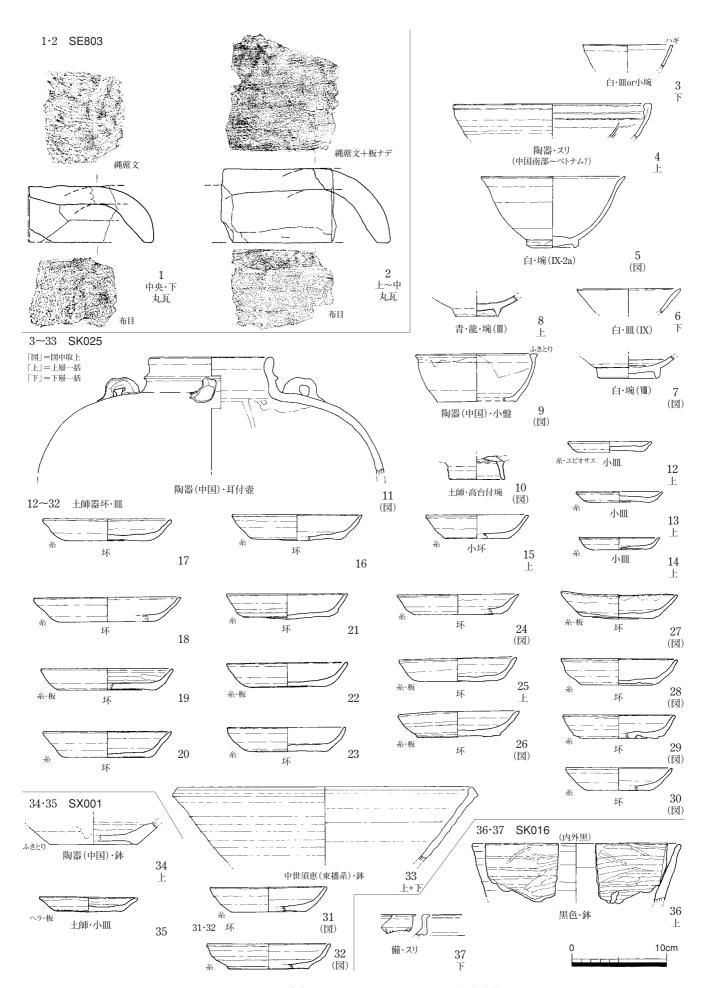


Fig.32 SE803 (2), SK025, SX001, SK016出土遺物

**SK301** (Fig.25) 60×80cmの楕円形土坑。深さ42cm。SK045に切られる。

**SK104** (Fig.25) 108×180cmの楕円形土坑。深さ72cm。南東側が浅く(深さ32cm)、テラス状。底面も凹凸があり、複数遺構の重複か。SK105を切り、SK431・432に切られる。出土遺物から(Fig.34-32)、14~15世紀か。

**SK105** (Fig.25) 118×130cmの不整円形土坑。深さ62cm。SK104に切られる。

SK506 (Fig.25) 130×146cmの不整円形土坑。深さ80cm。出土遺物から (Fig.34-34)、12世紀前半か。

**SK075** (Fig.25) 118×120cmの円形土坑。深さ63cm。

**SK620** (Fig.25) 94×112cmの不整円形土坑。深さ46cm。

以上の多くの「土坑」のうち、各遺構の記述にも触れたが、径100cm前後より小さいものは、実際は 柱穴になるものが多いと考えられる。ただし遺構があまりにも多く、建物は復元できなかった。

#### 3. 古代以前の遺構 (Fig.26)

**SK(SX)052** (Fig.26) 調査区北東部で検出した。まず古式土師器の高坏が上面で出土し(Fig.37-29)、 精査の結果、褐色砂覆土の58×70cmの楕円形、深さ27cmの土坑と判明した

**SK521** (Fig.26) SD011-Ⅱ 区西側で検出した。SD011に切られる。67×98cm、深さ32cmの不整形土坑。 図化していないが、大型の布留系または山陰系壺(甕?)の胴部下半の破片が出土している。

SK(SX)361 (Fig.26 SK098とSK102Aの間で検出。83×62 (以上) cm、深さ27cmの不整円形土坑。褐色砂覆土。古墳時代前期前半~中頃の布留系甕 (Fig.37-6) が出土。

**SX362**(Fig.21) SK100の北側で検出した。遺構プランは不明だが、地山砂よりも褐色の砂層覆土。図示していないが、新相(古墳時代前期後半以降)の布留系甕が出土。

以上の他にも、出土遺物が無いものの「第2面」で検出した遺構の一部や、砂丘面直上の褐色砂「包含層」で古墳時代遺物が出土した範囲は竪穴住居などの残骸(後世の遺構で大部分が破壊)の可能性がある。

#### 4. 出土遺物 (Fig.27~37)

ここまで出来るだけ多くの遺構を掲載し、また以下の遺物についても重要なものはもちろん、小片でも遺構の時期を決めるものを基本的に図化したほか、あるいは遺跡の時期幅を示したり、出土遺物の種類を網羅するように出来るだけ多くの遺物を図化掲載するという方針で臨んだため、結果として個々の遺物について説明する紙幅の余裕が無い。そのため以下の出土遺物の記述においては、特記すべきものについてのみ個別の説明を行い、他は挿図中に各遺物の出土遺構をはじめ、種類・時期などを記入している。かえって見づらい部分もあるかと思われるが、挿図と記述説明頁が離れてしまったことも含めてご寛恕を頂きたい。

をお出土遺物の分類、編年、時期(実年代)比定などは以下のものを主に参照した。古代末~中世の土器・陶磁器全般:中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、山本信夫・山村信榮1997「九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集/中世の輸入陶磁器:山本信夫1995「中世前期の貿易陶磁器」(中世土器研究会編1995)、續伸一郎1995「中世後期の貿易陶磁器」(中世土器研究会編1995)、山本信夫ほか2000『大宰府条坊跡XV』ー陶磁器分類編一(大宰府分類)、森本朝子1984「博多出土貿易陶磁分類表」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅳ(福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集)(博多分類)、佐藤一郎1996「輸入陶磁器の分類」『博多遺跡群出土墨書土器出土集成』博多研究会(大宰府分類と博多分類の対照)(※本報告においては「大宰府分類」を基本として記述している。)/古代末~中世の土師器(坏・皿類):山本信夫1990「統計上の土器一歴史時代土師器の編年研究によせて一」『乙益重隆先生古稀記念論文集』、楠瀬慶太2007「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相」『九州考古学』第82号/備前焼:乗岡実2000「備前焼擂鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会/古式土師器:久住猛雄1999(9頁前掲)、久住猛雄2003「古式土師器の分類と編年について」『青木3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第734集(古式土師器の高环接合法分類)/古墳時代土師器(前期末~中期末):重藤輝行・西健一郎1995「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性」『日本考古学』第2号。また挿図中の説明の凡例は各図に示した。(※→36頁へ)

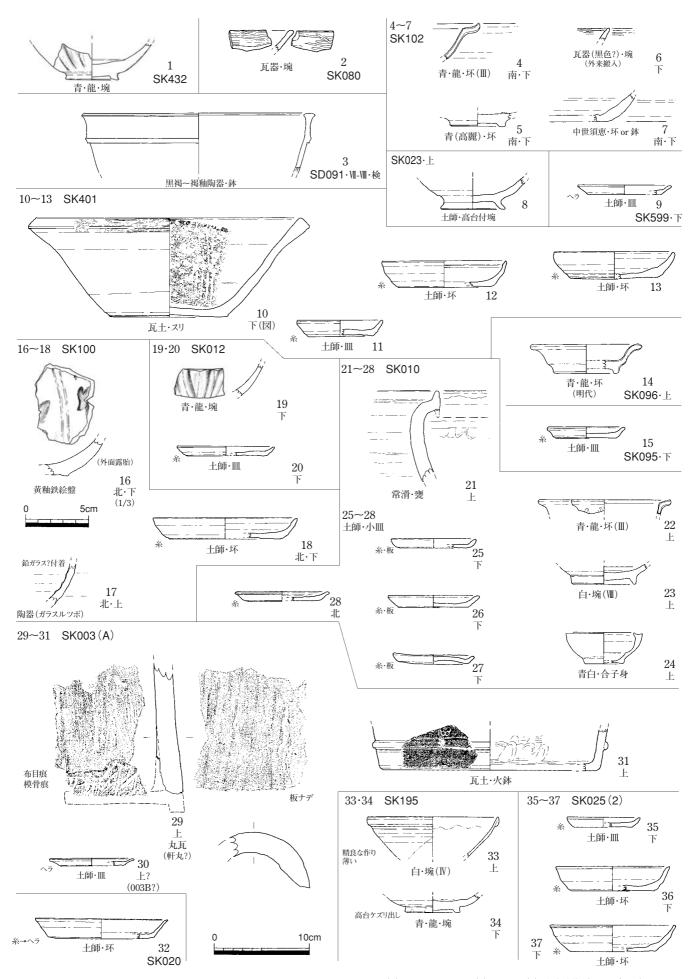
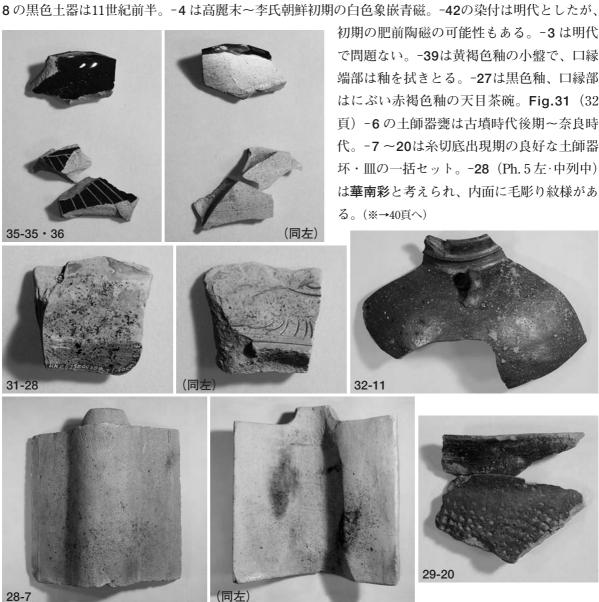


Fig.33 SK432, 080, 102, 023, 599, 401, 096, 095, 100, 012, 010, 003(A), 020, 195, 025(2), SD091(4) 出土遺物 (1/4、一部1/3)

### 1. 土製品(土器、瓦)·陶磁器(Fig.27~35)

Fig.27 (27頁) -12はいわゆる高麗陶器で暗青灰色を呈する高麗・朝鮮の無釉陶器。同様の破片がパンケース1箱分ある。-14は古代としたが中世の須恵器系陶器の可能性がある。-11の盤は全面灰釉。-42の土師器の高台付埦は11世紀代。Fig.28 (28頁) はSD011・SD091出土の瓦類を集めた。-4の「一」字紋の軒丸瓦は筥崎で散見する。-7 (Ph.5左・中列下) は完形の雁振瓦 (衾瓦)。-1 の軒平瓦は平面形が台形状。瓦類は本調査でパンケース5箱前後分があり、特別多量ではないが、瓦を用いる建物が存在したのは間違いない。Fig.29 (29頁) -1 ~18のSD091出土の陶磁器(青磁ほか)は明代前半期(14世紀後半~15世紀前後)が多く(古い遺物も混入)、一部は元代後期(14世紀)および高麗末期である(-12,17)。-19は備前焼Ⅳ B期(15世紀)。-20 (Ph.5右列下)は焼成がやや軟質で土師器と瓦質の中間的焼成だが、「十瓶山窯系」ないし「亀山窯系」か(佐藤龍馬1998)、「下り山窯系」(出合宏光1997)の中世須恵器の可能性がある。(田中克子氏教示。佐藤竜馬1998「十瓶山窯と亀山窯」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要』 W、出合宏光1997「下り山窯跡研究ノート」『肥後考古』第10号。)同類の焼成・胎土と調整を有する破片が1/2箱程度出土している。Fig.30 (31頁) -6 の皿は瓦器としたが瓦質土器とすべきか。-7,8の里色土器は11世紀前半。-4 は高麗末~李氏朝鮮初期の白色象嵌青磁。-42の染付は明代としたが、



Ph. 5 箱崎52次遺物写真(1) ※番号はFig番号と枝番

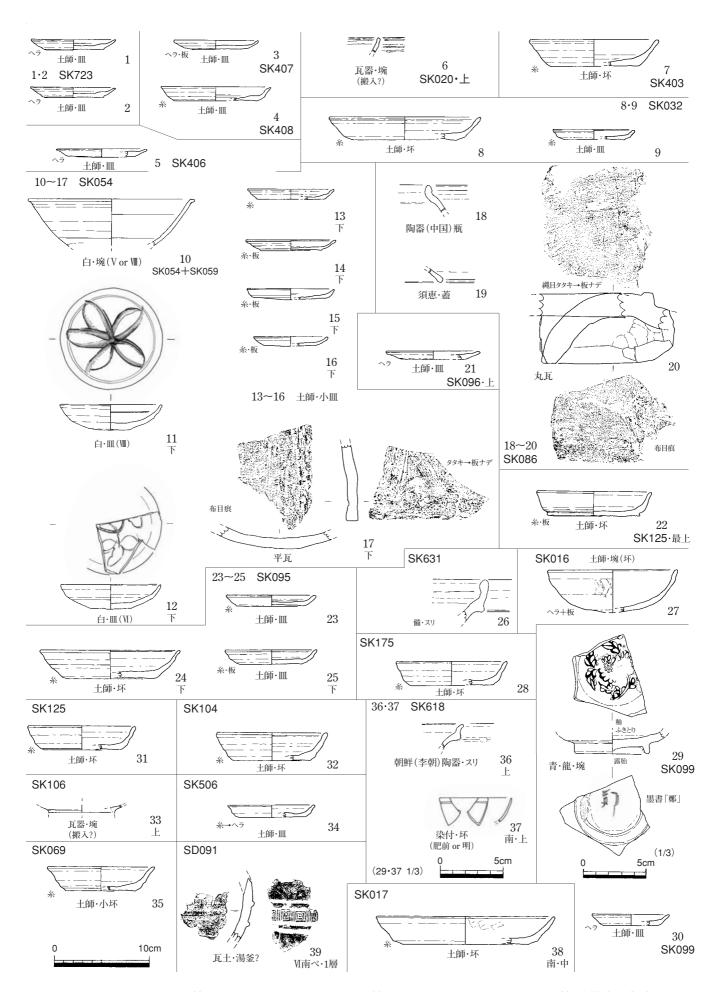


Fig.34 SK723, 407, 408, 406, 020(2), 403, 032, 054, 086, 096, 125, 095, 631, 016(2), 175, 104, 106, 506, 069, 618, 099, 017, SD091(5) 出土遺物 (1/4、一部1/3)

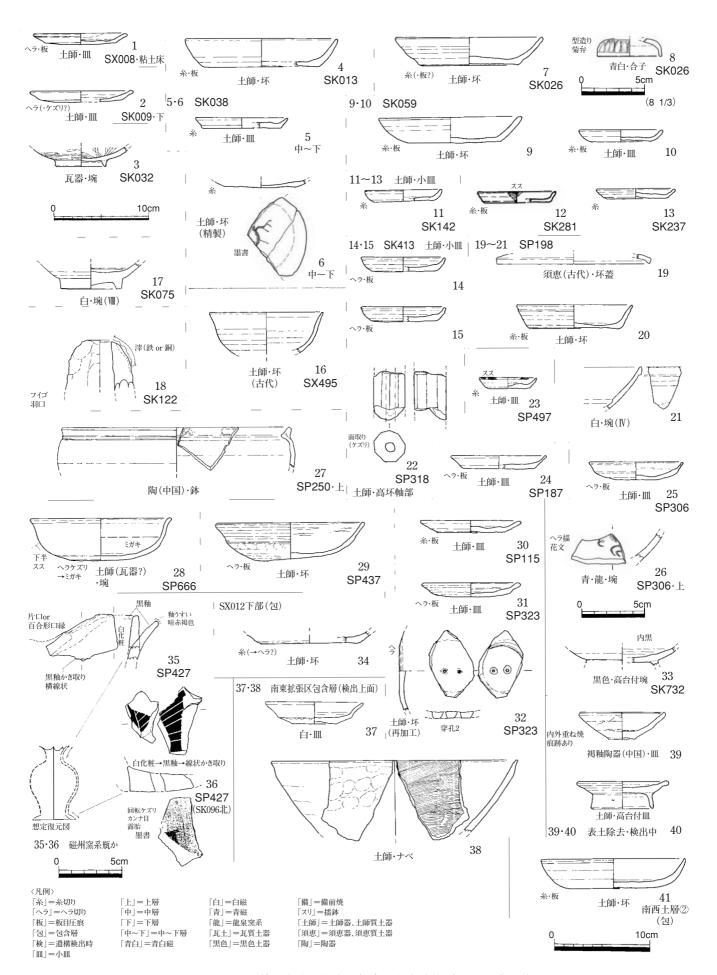


Fig.35 その他の土坑、柱穴、包含層出土遺物 (1/4、一部1/3)

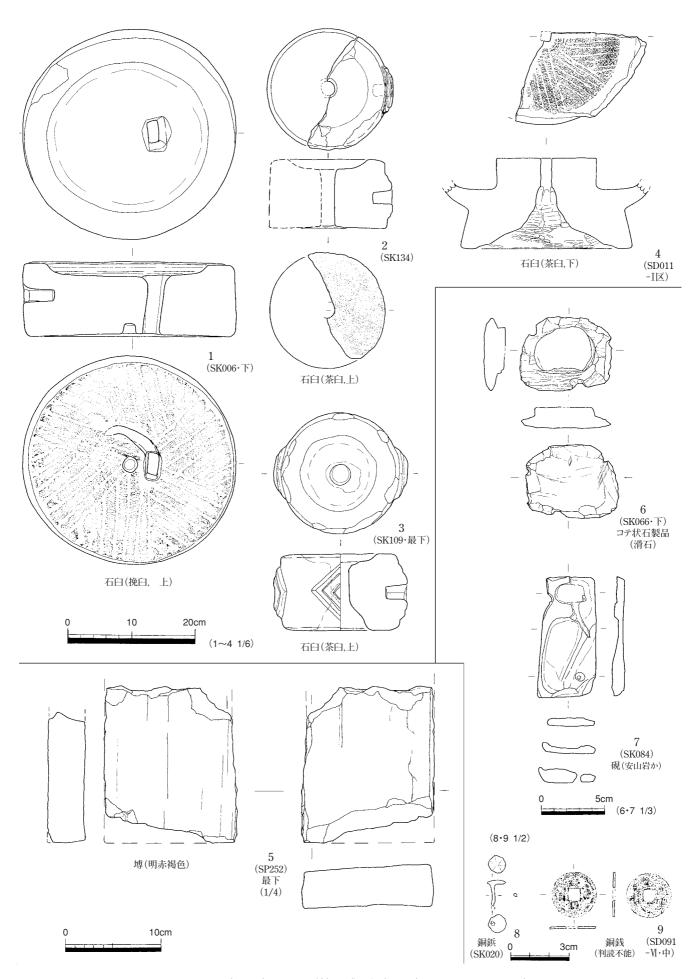
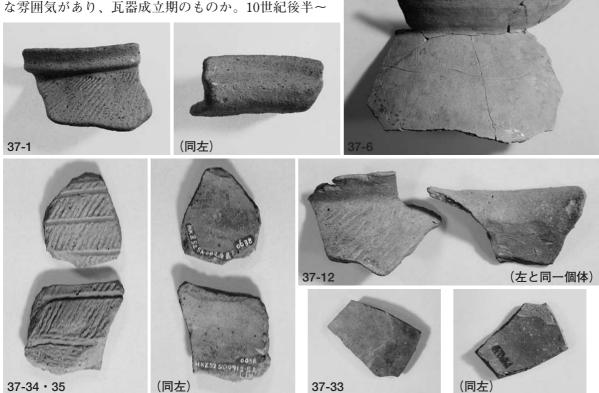


Fig.36 石製品 (石臼その他), 博, 銅製品 (1/6、1/4、1/3、1/2)

Fig.31-29はFig.28-20と同様の「十瓶山窯系」などの中世須恵器か。-34は赤焼き(軟質焼成)の瓦。 他の瓦の大部分は通有の灰色瓦質焼成である。-2の瓶は暗灰~褐灰色。Fig.32(33頁)-4は、内外面 に鉄漿を塗布し暗赤褐色に発色させた陶器擂鉢で、華南または安南(ベトナム)陶器の可能性があ る。-11 (Ph. 5 右列中) は暗褐~暗赤褐色釉の四耳壺 (耳は現存 1 個のみ)。 XII - 1 類。- 9 はにぶい黄 褐色釉の小盤(Ⅱ-1a類)。-34の陶器鉢(または壺)は、外底はケズリ出し成形、外面は釉拭きとり、 内面は緑褐色釉だが二次被熱で黄褐色化する。-37は備前焼としたが口縁部形態から中国陶器の擂鉢 (小鉢 II-1a 類?) の可能性もある。Fig.33 (35頁)-6 は楠葉型(または大和型?) 瓦器埦とみられ搬 入品。-3 はFig.29-18と同一の可能性がある。-8 は10世紀末~11世紀前半の土師器埦か。-17は暗灰色 を呈する陶器だが、乳白色の鉛ガラスが付着し、ガラス坩堝に転用されたもの。-31は13世紀後半~14 世紀前半までの比較的古い瓦質土器の深鉢か。脚部は不明である。-21の常滑焼甕は口縁部が一部欠失 し不明確だが、13世紀後半の型式か。Fig.34(37頁)-6は和泉型(?) 瓦器埦の搬入品か。-18は暗オ リーブ褐色釉の瓶で、胎土は褐灰色。-19は中世(?)須恵器の蓋か。灰色~内面にぶい褐色。-26は 備前焼∨期(16世紀)の型式。-33は薄く精巧な作りの瓦器埦で、おそらく楠葉型か(搬入品)。-36は 李氏朝鮮の陶器擂鉢と思われ、外面は黒色釉、胎土は小豆色(暗赤褐色)。-37の染付は明染か肥前初期 か不明。-22は13世紀末から14世紀前半の土師器坏であろう。-31も同様の時期(同一遺構)。-27はハ ケメ調整もあり、底部に板目圧痕状の調整もあるが (タタキ?)、古代・中世よりはむしろ古墳時代前 期~中期の鉢(坏)である可能性がある。-29は体部が欠損するが、内底に印花文(陰印刻草花文)の ある龍泉窯系青磁 I-5 類で13世紀後半か。外底に「鄭|字の墨書あり。

Fig.35 (38頁) は図が未掲載の遺構や包含層出土の遺物。-3 の瓦器埦は筑前型。-6 は非常に薄く丁 寧な作りの土師器坏で、15世紀頃のものか。外底に墨書があるが、文字か絵画か不明。-16の土師器坏 は9~10世紀のもの。-33の高台付埦も10世紀のもの。遺物はごく僅かだが、筥崎宮成立期前後の遺構

が存在した可能性がある。-28の埦は土師器だが瓦器的



箱崎52次遺物写真(2)

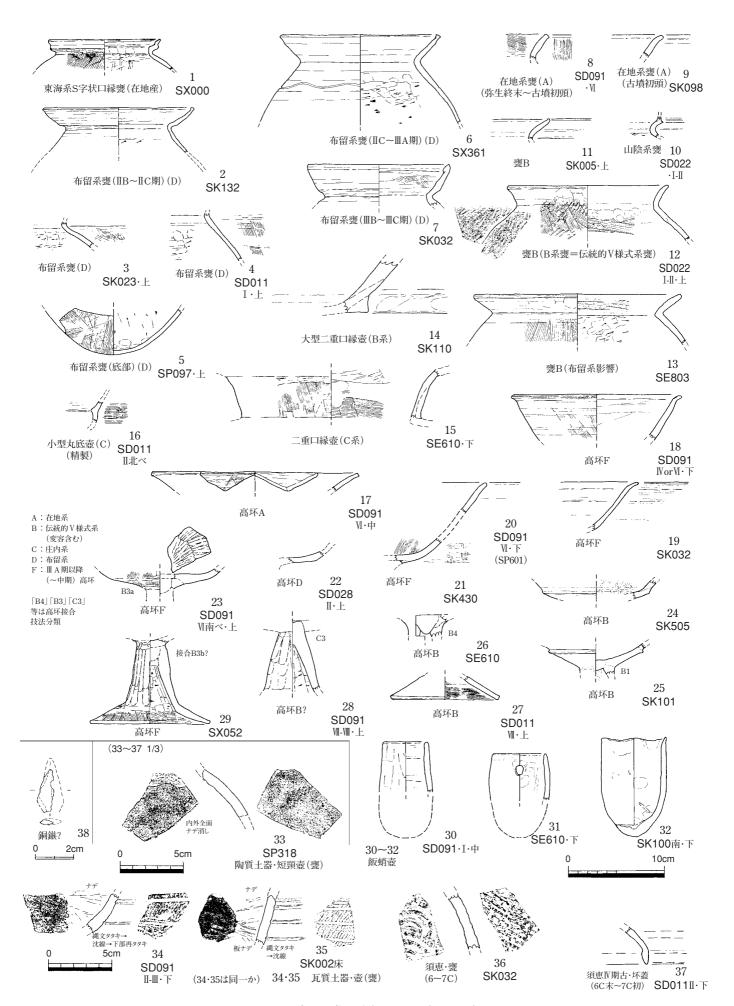


Fig.37 古墳時代の土師器ほか(1/4、1/3)

11世紀前半。-40の高台付皿は型式的に12世紀後半に下る。-19は奈良時代の坏蓋。この時期の遺物は箱崎では珍しい。-31は土師器皿底部片を2カ所穿孔して再利用(?)したもの。用途不明。-35は磁州窯系瓶で、片口ないし百合形口縁に復元される。その他の特徴は図中に説明した通りだが、外底に墨書がある。やや珍しい器種で、特別な用途があったものか。-18は鞴羽口で、送風口の先から緑黒褐色半透明のガラス状滓(銅滓か?)が垂れ流れている。

#### 2. 石製品, 銅製品ほか (Fig.36)

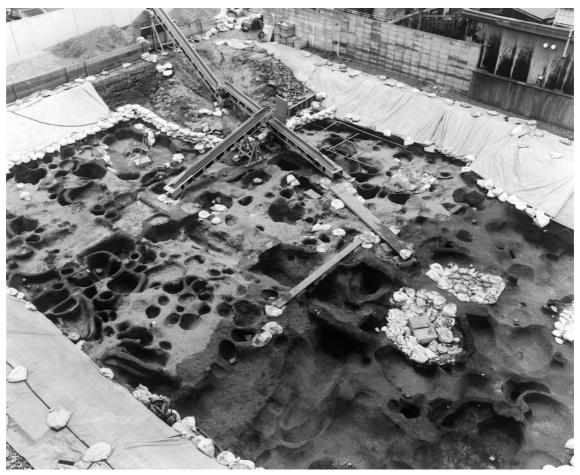
1~4 は石臼。石材は未詳(いずれも砂岩か)。1 は六分画、2 は八分画、4 は十二分画(?)である。本調査では石臼の出土が目立つ感があるが、それに意味があるかどうかは他地点との比較が必要である。6 は硯。安山岩ないし頁岩製。5 は塼。明赤褐色~橙褐色。本調査では、合計して1~2 箱程度の量の塼が出土しているが、全て同様の色調である。8 は銅鋲。9 は銅銭だが「通寳」の部分は辛うじて読めるが他は不明。もう 1 枚の銅銭があるが、銹化と摩滅でさらに判読不能。遺構が濃密な割には銭貨の出土に乏しい。博多に比べて箱崎では銭貨の出土が少ない傾向があるが、本調査区も同様の傾向となった。Fig.37-38(SK610上層出土)は銹化が激しく脆くなっているが、弥生時代後期~古墳時代前期の銅鏃の残骸と判断した。ただし復元が正しいか自信が無い。その他、パンケース 3 箱前後の鉄製品(一部は鉄滓)あるが、銹落としなどの処理が間に合っておらず、報告は割愛させていただく。大部分が中世のもの。

#### 3. 古墳時代の土器 (Fig.37)

1 は東海系S字状口縁甕 (Ph. 6 左上)。 B 類新段階であるが、にぶい橙色の胎土 (12, 29などの本調査 区の多くの古式土師器胎土に類似)や、ハケメがクシメ状ではないこと、肩部横ハケが欠如しているな ど**在地産の可能性**がある。箱崎40次でも色調は明るい黄褐色だが在地産と考えられるS字甕(B類新~ C類古)が出土している。なお博多や堅粕出土のS字甕はいずれも搬入品であり、西新町では全く出土 しないなど興味深い出土状況がある。**2,3,5,8~15,17,22,24~28**は**前期初頭~前期前半(ⅡA~ⅡC期)** で、技法系統はA(在地系)、B(伝統的V様式系)、D(布留系)、E(山陰系)がある。4.6.16は前期 中頃(IC~ⅢA期)の、7,18~21,23,29は前期後半(ⅢA期新相)~中期前半(重藤1995のⅢB期) までの土器である。他にも前期末~中期初頭(重藤1995のⅢA期=久住1999のⅢB期)の**布留系甕**や高坏 の出土がある。布留系甕では、2~6のⅡA~ⅢA期のものは、明黄褐色~明橙色を呈し器壁が薄いが、 7のような中期初頭(久住1999のⅢB期)前後に下る型式はにぶい橙色(橙褐色)気味になり、器壁が厚 くなる。挿図中の高坏接合法分類は久住2003 (34頁前掲)による。Ⅲ A 期新相以降の「高坏 F」 (19~21, 23, 29) はバリエーションがある。他にもう1点、脚部の残りが良い資料がある。30~32は飯蛸壺。形態 に多様性がある。37は飛鳥時代初頭(Ⅳ期古相)の須恵器の坏蓋。本調査区では中期中頃(須恵器出現 期)以後の遺物は少なくなる。33 (Ph.6右列中)は内外面ともに丁寧なナデ消し仕上げ。明るい灰色~ 青灰色の硬質焼成で**陶質土器**(慶尚南道=伽倻か)の可能性。34・35(Ph.6左下)は同一個体の**瓦質土** 器。にぶい淡褐灰~黄灰色。胴部がやや筒状気味になる大型の短頸壺か。縄文タタキ後に螺旋状沈線を 施すが、34は横方向の縄文タタキが沈線を再度切っている。丸底化の底部再タタキであろう。このよう なタタキの特徴は、おそらくは全羅南道(栄山江流域)のものであろう。内面は板ナデ後ナデ。

## Ⅲ. まとめ

11世紀以来の集落の連続的な展開が確認された。なお筥崎宮建立期(10世紀)の確実な遺構は不明である。SD011・091等の区画溝は現在の地割よりも方位が西に僅かに振れ、2次調査の区画溝と一致し、筥崎宮外縁の古い街割を示す。また古墳前期の土器は少数であるが、韓半島系土器の搬入や東海系の移住者を示す在地産S字甕を出土するなど、当時の箱崎遺跡の交易中継地としての性格がより明らかになった。



1. 調査区全景(北西から)



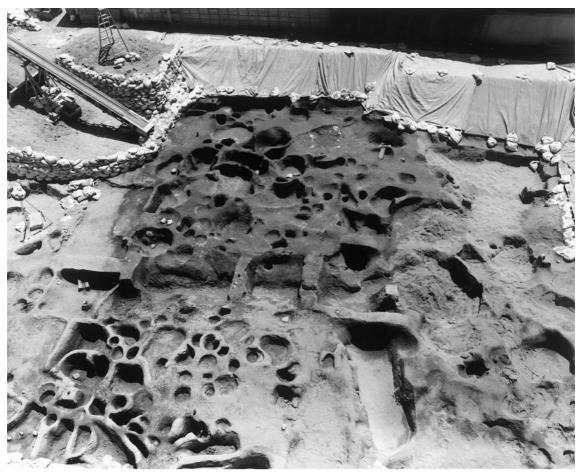
2. 調査区全景(北東から)



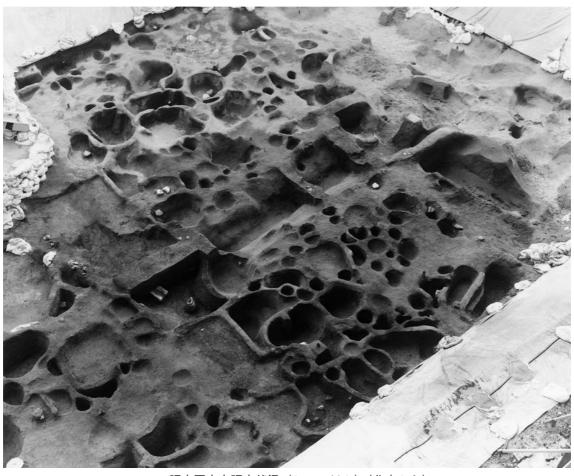
3. 調査区中央~西側調査状況(北から)



4. 調査区西側調査状況(SD022ほか)(南から)



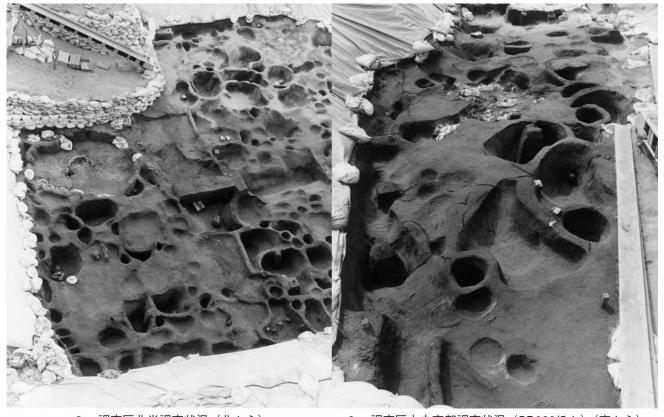
5. 調査区中央調査状況(北から)



6.調査区中央調査状況(SD011ほか)(北東から)

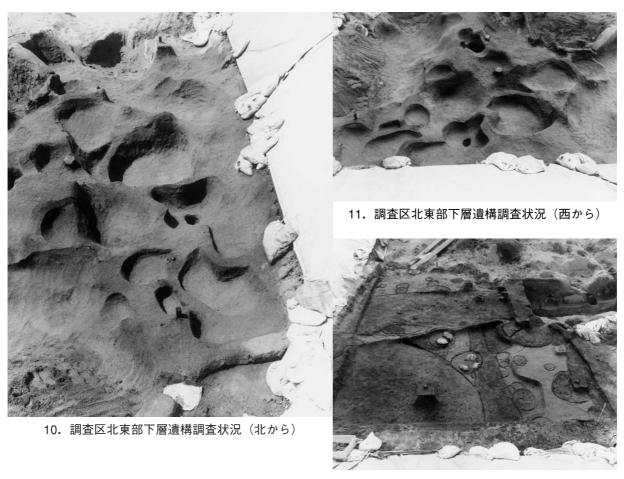


7. 調査区中央北部調査状況(SD091, SD011ほか)(北から)



8. 調査区北半調査状況(北から)

9. 調査区中央南部調査状況(SD028ほか)(東から)



12. 調査区南東部遺構検出状況(東から)



13. 調査区南東部遺構調査状況(東から)



14. SD091-W・V・M区 (北から)



17. SD091-IV区遺物出土状況(北から)



18. SD091-WIV WI区 (北から)



15. SD091-I・I・I区 (北から)

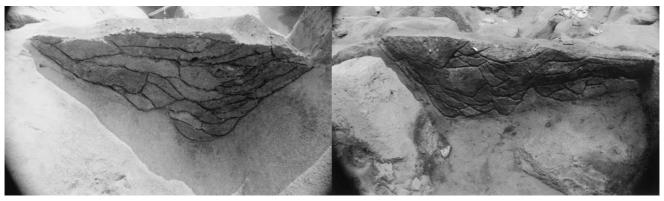


19. SD091-VI区南土層(Fig.8-②)



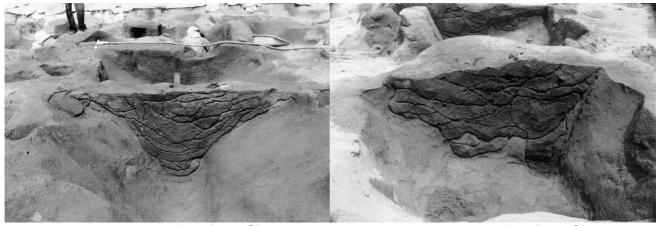
16. SD091・SD011連結部掘削状況(東から)

20. SD091-V区北土層(Fig.8-③)



21. SD091- I 区南上層(Fig.8-⑤)

23. SD011- I 区北土層(Fig.8-⑧)



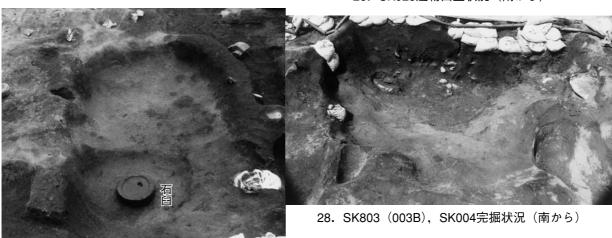
22. SD011-VI区西土層(Fig.8-⑦)

24. SD011-Ⅲ区北土層(Fig.8-⑩)

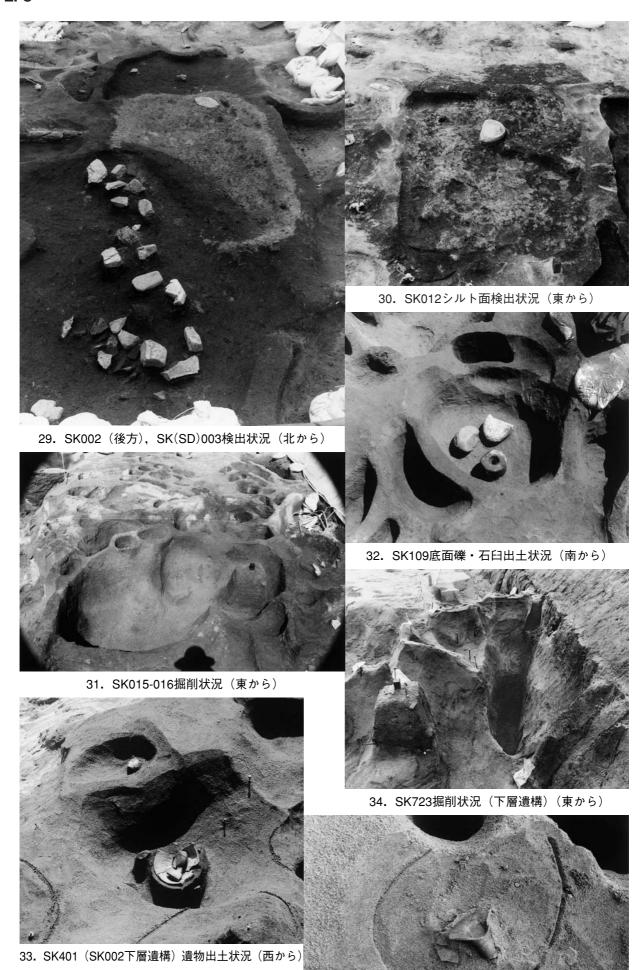


25. SX001礫群検出状況(東から)

26. SK025遺物出土状況(南から)



27. SK006遺物出土状況(北から)



35. SK521古式土師器出土状況(北から)

# 報告書抄録

| ふりがな   | はこざき33 ーはこざきいせきだい52じちょうさのほうこくー             |  |  |  |
|--------|--|--|--|--|
| 書 名    | 箱崎33                                       |  |  |  |
| 副 書 名  | ー箱崎遺跡第52次調査の報告ー                            |  |  |  |
| 巻 次    |  |  |  |  |
| シリーズ名  | 福岡市埋蔵文化財調査報告書                              |  |  |  |
| シリーズ番号 | 997  |  |  |  |
| 編著者名   | 久住猛雄                                       |  |  |  |
| 編集機関   | 福岡市教育委員会                                   |  |  |  |
| 所 在 地  | 〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667 |  |  |  |
| 発行年月日  | 西暦2008年 3 月17日                             |  |  |  |

| 遺市遺北東調査 | 所在地ふりがな ふくおかしひがしくはこざき 1 ちょうめ1927ばんほか 遺 跡 所 在 地 福岡市東区箱崎 1 丁目1927番外 3 筆 市町村コード 40130 遺 跡 番 号 2639 北 緯 33°36′48″(世界測地系)東 経 130°25′25″(世界測地系) 調 査 期 間 2006.06.15~2006.08.28 調査面積(m²) 350.5 m² 調 査 原 因 共同住宅建設 |   |  |  |
|---------|--|---|--|--|
| 集落      | 古墳時代、<br>平安時代、<br>鎌倉時代、<br>室町時代  | 溝6+土坑50以上(うち井戸<br>2以上含む)+石敷遺構1+<br>柱穴多数 | 古式土師器+土師器(古墳<br>時代)+須恵器+陶質土器・<br>瓦質土器(朝鮮半島三国時<br>代)+土師器(平安~室町時<br>代)+瓦質土器(中世)+瓦<br>器+黒色土器+輸入陶磁器<br>(中国・朝鮮)+国産陶器+<br>瓦+塼+石製品(石臼ほか)<br>+銅銭+鉄製品 | 非常に密集した遺構群(中世都市)、中世の筥崎宮の一画か、街割を示す区画溝、古墳時代前期の搬入土器(東海系S字状口縁甕、朝鮮半島系瓦質土器・陶質土器) |

# 箱 崎 33

- 箱崎遺跡第52次調査の報告 -福岡市埋蔵文化財調査報告書第997集

2008年3月17日

発 行 福岡市教育委員会 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社ホンド印刷 福岡市東区松田 3-10-32